

ミャンマー(ビルマ)難民支援図書館事業 第一フェーズ評価報告書

2004年8月

(社) シャンティ国際ボランティア会 (SVA)

はじめに

(社)シャンティ国際ボランティア会は、2000年9月よりタイ政府の承認ならびに国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) との事業実施団体の契約に基づき、タイにおけるミャンマー (ビルマ) 難民支援図書館事業を開始しました。2003年8月までの3年間の第一フェーズ (実施期間) の終了時にあたり評価を実施しました。

本事業では、各難民キャンプでの図書館開館後6か月後 (事業開始時約9か月から1年後) に中間評価を図書館活動専門家を中心に実施してまいりました。中間評価においては、目標達成度や妥当性、効率性を主に調査しました。中間評価の結果は、そのつど、図書館員およびキャンプの図書館委員会のメンバーに報告され、今後の図書館運営について改善の方策について討議をする機会が設けられてきました。

したがって、今回の終了時評価は、中間評価を補完することを念頭において、ステークホルダー (事業関係者) による参加型評価を行い、これまでの3年間を振り返り、現在抱えている課題、課題解決の方法、行動計画づくりを中心に話し合いました。

本報告書は、終了時の参加型評価の結果と中間評価報告書の両方を掲載しております。

本事業は、現在2006年8月までの第二フェーズを実施中で、対象地域を拡大しております。本評価結果を活かして、本事業を実施していくとともに、難民キャンプでの図書館活動支援のノウハウの蓄積、モデルの形成を推進していく予定です。

2004年8月

(社) シャンティ国際ボランティア会 (SVA)

報告書の構成

1 . 事業概要.....	3
2 . 終了時評価報告	
(1) 評価方法.....	7
(2) 評価結果.....	8
(3) 評価データ.....	10
3 . 中間評価報告	
(1) メコンカ・キャンプ図書館事業中間評価報告書.....	14
(2) メラマルアン・キャンプ図書館活動中間評価報告書.....	40
(3) ヌポ・キャンプ図書館活動中間評価報告書.....	50
(4) メラ・キャンプ図書館活動中間評価報告書.....	59
(5) ウンピアム・キャンプ図書館活動中間評価報告書.....	69

(社)シャンティ国際ボランティア会

160-0015 東京都新宿区大京町3-1 慈母会館2, 3F

電話：03-5360-1233 FAX：03-5360-1220

1. 事業概要

(1) 事業名: ミャンマー(ビルマ)難民支援図書館事業

(2) 実施期間: 第一フェーズ 2000年9月から2003年8月(3年間)

(3) 対象地域および支援した図書館の概要:

キャンプ名	メコンカ・キャンプ	メラマルアン・キャンプ	ヌボ・キャンプ
キャンプ人口	17,087人	11,752人	12,439人
図書館設立日	2001年3月19,20日	2001年6月14日(第1-3)	2002年5月3日
図書館設立日	2003年3月7日(第2再館)	2003年3月29日(第4)	—
図書館数	3館(第1、第2、第3)	4館(第1、第2、第3、第4)	2館(第1、第2)
運営母体	図書館委員会 6名	図書館委員会 6名	図書館委員会 9名
図書館員数	各館2名、計6名	各館2名、計6名	各館2名、計4名
閉館日	日曜日、月曜日	日曜日、月曜日	月曜日、木曜日
開館時間	11:00～17:00	11:00～17:00	9:00～17:00
貸し出しシステム	中学生以上へ貸し出し 一人1冊まで(1週間)	中学生以上へ貸し出し 一人1冊まで(1週間)	中学生以上へ貸し出し 一人2冊まで(2日間)
建物の規模	9m×7m	9m×7m	13m×8m
1ヶ月の平均利用者数(1館あたり)	子ども4,400人 大人900人	子ども2,600人 大人690人	子ども800人 大人400人

キャンプ名	ウンピナム・キャンプ	メラ・キャンプ	バンドンヤン・キャンプ
キャンプ人口	18,846人	45,136人	3,634人
図書館設立日	2002年8月31日	2002年12月6,7日	2003年7月11日
図書館数	3館(第1、第2、第3)	5館(第1、第2、第3、第4、第5)	1館(第1)
運営母体	図書館委員会 9名	図書館委員会 15名	図書館委員会 6名
図書館員数	各館2名、計6名	各館2名、計10名	各館2名、計2名
閉館日	日曜日、月曜日	土曜日、日曜日	日曜日、月曜日
開館時間	10:00～16:00	10:00～17:00	9:00～16:00(平日) 8:00～16:00(土曜)
貸し出しシステム	中学生以上へ貸し出し 一人2冊まで(3日間)	中学生以上へ貸し出し 一人2冊まで(3日間)	中学生以上へ貸し出し 一人1冊まで(3日間)
建物の規模	12m×7m	12m×7m	12m×7m
1ヶ月の平均利用者数(1館あたり)	子ども2,300人 大人580人	子ども2,100人 大人370人	子ども— 大人

注) キャンプ人口は2003年7月現在

(4) 目標、成果、活動

上位目標: 難民の子ども、成人の知識、態度、技能が向上、発達する。

プロジェクト目標: 難民キャンプでの図書館活動が改善する。

成果1: キャンプ図書館のサービスが改善される

- 活動
1. キャンプ図書館の建物を建設・補修する
 2. カレン語、ビルマ語での子ども及び大人の本を供与する
 3. 設立後、各図書館のモニタリング・フォローアップを行う
 4. 「おはなし」及び子どもたちの文化活動を行う
 5. 移動図書館活動における教員を対象とした研修を行う。

図書館を設置、改修するキャンプ

キャンプ名	新築する図書館数	改修する図書館数	合計
Mae Kong Kha	3	-	3
Mae Ra Ma Luang	3	-	3
Nu Po	2	1	3
Umpiem Mai/Huay Kalok Side	1	1	2
Umpiem Mai/Mawker Side	1	1	2
Mae La	1	2	3
合計	11	5	16

成果 2 : 図書館員の能力が強化される

- 活動
1. 図書館員の養成および現職研修を行う。
 2. 図書館員の手当てを支援する

成果 3 : カレン語・ビルマ語での本が出版され、配布される

- 活動
1. カレン族の民話を収集、記録する
 2. 図書館員が謄写版を活用してカレン語・ビルマ語の出版物を自主的に製作・配布する
 3. カレン語、ビルマ語での図書を出版、配布する

(5) 支援活動の概要

図書館の建設・改修

各図書館は、それぞれのキャンプ図書館委員会との視察により、立地条件や人口、子どもの足を考えた場所(セクション)に建設されている。建築資材は主に竹とユーカリを用い、屋根はチャークという巨大な葉を約 1500 枚重ねて使用。難民キャンプ内には電気がとっていないため、室内の明り取り用にスカイライト(半透明な波型プラスチック)を6枚から 8 枚取り付けられている。また雨期の場合の浸水を考慮し、高床式(ヌポの大人の部屋をのぞく)に建築されている。建築にはキャンプの人たちが約8人がかりで10日から2週間ほどで手がけ、各図書館の脇にはトイレも設置されている。

館内は、児童室・大人の部屋・司書室と三部屋あり、そのなかでも児童室は各館共通してもっとも広いスペースをとっており、大勢の子どもを対象に読み聞かせや文化活動(工作やお絵かきなど)がおこなえるように考慮されている。本棚は耐久性を考えてスチール枠と木材を使用したオリジナルのデザイン。絵本の表紙を見せて並べられるように児童の身長、目線を考えた高さで製作されている。



メラマルアン第2図書館の外観

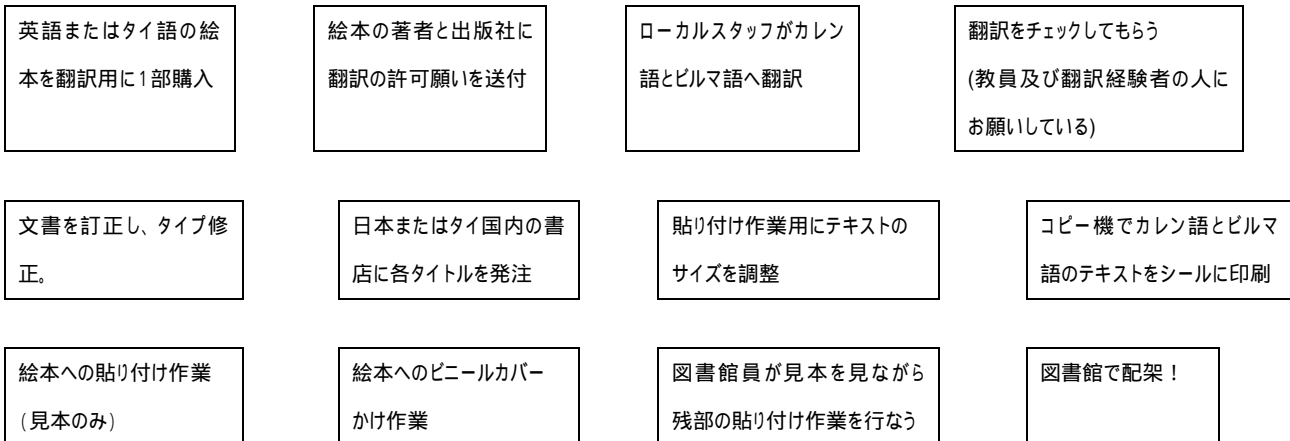


メラマルアン第3図書館の館内

図書の制作・配布

図書館には、キャンプ内での主な使用言語であるカレン語と将来的な帰還に備えて母国の共通語であるビルマ語の二言語による本を配布している。ビルマ語の書籍に関しては、主にタイ国内の書店を通じてビルマ国内へ発注をだしているが、カレン語に関しては出版をしている団体が非常に限られ、現在は教会の発行している雑誌3タイトル(季刊)と他の NGO(Drum Publication)の発行している本や資料が主となっている。児童書についてはさらに入手が困難なため、タイ・カレン系の図書館事業スタッフが英語またはタイ語からカレン語、ビルマ語への翻訳をおこない、テキストを貼り付けたうえで配布をしている。1タイトルにつき4冊(3冊カレン語・1冊ビルマ語)、68タイトルが配布済みである。

(絵本が図書館に届くまでの作業経路)



キャラバン公演(キャンプ及び周辺のタイの小学校)及び図書館員、教員への研修

SVA バンコク事務所(シーカーアジア財団)の図書館スタッフの協力によりこれまでキャラバン公演を難民キャンプ及び周辺のタイの小学校にて実施。またタイの小学校の教員を対象にお話しの理論・技術についての研修も実施してきた。実施地、内容については以下の通りである。

- 2001年3月 メコンカ・キャンプにてキャラバン公演(4公演)
 - メーサリアン郡の小学校教員研修実施(7校-25名参加)
 - メーサリアン郡のタイの小学校(5校)にてキャラバン公演
 - ソブモイ郡のタイの小学校(6校)にてキャラバン公演
- 8月 ソブモイ郡の小学校教員研修

メコンカ・キャンプ図書館員研修(ペーパーサートの製作及び活用方法)

2002年5月 メコンカ・キャンプ図書館員研修(謄写版の使用方法、ゲーム・歌)

メラマルアン・キャンプにてキャラバン公演(3公演)

メラマルアン・キャンプ図書館員研修(謄写版の使用方法、ゲーム・歌)

メーサリアン郡のタイの小学校(8カ所)にてキャラバン公演

11月 ウンパン郡の小学校教員研修(8校-26名参加)

ウンパン郡のタイの小学校(10校)にてキャラバン公演

ヌボ・キャンプにてキャラバン公演(2公演)

ポ・プラ郡の小学校教員研修(20校-46名参加)

ターソンヤン郡の小学校教員研修(20校-40名参加)

2003年5月 メラ・キャンプにてキャラバン公演(6公演)

ウンビナム・キャンプにてキャラバン公演(4公演)

メーサリアン郡の小学校教員研修(9校-32人参加)

ソブモイ郡の小学校教員研修(12校-50人参加)

難民キャンプでのキャラバン公演は大勢の児童と大人が歌やゲーム、人形劇「あかずきんちゃん」を楽しんだ。2002年度前半までは主にシーカー・アジア財団図書館スタッフによる実演であったが、同年後半よりメーサリアン、メーソット事務所のスタッフも担当を任せられるようになり、2003年度のキャンプでの公演では同事務所スタッフのカレン語による人形劇が行われるなど、スタッフ自身の能力も高まってきている。



メコンカキャンプでの野外公演

2. 終了時評価報告

(1) 評価方法

本事業の評価は、事業に関係したステークホルダー(事業関係者)である UNHCR や教育関係 NGO、カレン難民委員会をはじめ、難民キャンプ内のキャンプ委員会、教育委員会、図書館員、事業の裨益者である学校の教員や一般の大人、そして子供たちに対するグループインタビューと、難民キャンプ内の図書館関係者(難民キャンプの教育委員会、図書館委員会、図書館員)による参加型ワークショップ形式によって行われた。

それぞれのグループへのインタビューについては、質問項目について事前にスタッフ間で協議を行って作成し、ローカルスタッフがカレン語に通訳して実施された。インタビューの結果はその後スタッフ間でシェアされ、インタビュー調査の翌日に関係者が参加して行われたワークショップで発表され、シェアされた。

ワークショップはメコンカとウンピナム両難民キャンプでそれぞれ終日行われ、各スタッフから発表されたインタビュー結果をもとに、グループ(難民キャンプのキャンプ委員会、教育委員会、図書館員)間で項目ごとに評価を加え、今後の解決策や取り組み方をディスカッション形式で検討してもらった。

基本的には、SVA のスタッフと難民キャンプで事業に参加した関係者による内部評価という形をとった。

評価調査団の構成

調査団メンバーは下記の通りである。

日本人スタッフ

秦 辰也 常務理事・国際総局長(バンコク事務所長兼務)

三宅 隆史 事務局次長

小野 豪大 海外事業課長

中原 亜紀 メーソット事務所所長

渡辺 有理子 図書館専門家

ローカルスタッフ

メコンカ・キャンプ

ムラビ・ラウィローン メーサリアン事務所フィールドコーディネーター

マライ・モンコンウィブンポン 図書館事業アシスタント・コーディネーター

ウンピナム・キャンプ

ディディ・ワナコーンコンラップ 図書館事業コーディネーター

パナッター・コロユットパナポン 図書館事業アシスタント・コーディネーター

評価調査日程

2003年8月25日～29日

8月25日(月) 午前8時 メーサリアンからメコンカ難民キャンプへ移動

午前中 難民キャンプ委員会、教育委員会、学校教員、及びビルマ難民セクションでインタビュー

午後 図書館の裨益者(大人、こども)にインタビュー

その後、メーサリアンに戻り、教育 NGO 関係者と KWO (Karen Women's Organization) 関係者からヒアリング

- 8月26日(火) 午前8時 メーサリアンからメコンカ難民キャンプへ移動
終日第2図書館においてワークショップを開催
- 8月27日(水) メーサリアンからメーソットに移動
午後1時半 UNHCR のフィールドオフィサーからヒアリング
午後4時 カレン難民委員会関係者からヒアリング
午後6時 NGO 関係者(Consortium-Thailand, ZOA ,TOPS) からヒアリング
- 8月28日(木) 午前8時 メーソットからウンピナム難民キャンプへ移動
午前中 難民キャンプ委員会、教育委員会、学校教員にインタビュー
午後 図書館の裨益者(大人、こども)にインタビュー
- 8月29日(金) 午前8時 メーソットからウンピナム難民キャンプへ移動
終日第3図書館においてワークショップを開催
まとめ

(2) 評価結果

ステークホルダー(事業関係者)による参加型評価ワークショップで本事業の良かった点、改善すべき点・提言として以下が出された。

良かった点

1. 公平性、平等性が高い

図書館の利用状況について、年齢格差を超えたサービスが提供できているのかどうかについて質問したところ、子どもから大人まで誰でもいられる場所となっているという回答がキャンプ委員会から得られた。この点は、図書館の利用料が無料であり、貧しい世帯であってもわけへだてなく利用できるルールであること、および図書館員が非識字者であっても利用しやすい雰囲気を作っていることが原因であろう。また、教育委員会メンバーの話によると、図書館は、難民にとって静かで読み書きのできる知識人のみが利用するところであるというイメージが強かったようであるが、この点は、SVA の図書館活動支援の方針によって、かなり覆され、敷居が低い場所、誰でも気兼ねなく利用できる場所として認識されているようである。他方で、子どもが煩い、図書館は子どもが行くところというイメージも大人の難民の間でもたれたため、当初の図書館建築の様式を変更し、大人の部屋にはいるためには、図書館の入口から子どもの部屋を通らないといけなかったのを、入口から直接大人の部屋に入ることができるようにした。

これらのヒアリングの結果から、難民の年齢に関わらず、公平かつ平等な図書館サービスが提供されることができたとと言える。

2. 余暇時間を有意義に過ごせる居場所

特に子どもにとって、図書館ができる前は、学校が終わると自宅で家事を手伝うか、遊ぶか、スポーツをするかしか余暇の時間の過ごし方はなかったが、図書館開館後は、有意義に文化活動や読書の時間を過ごすことができるようになったという意見が親や教員から出された。これらの意見から、子どもたちにとって図書館が、余暇の時間を有意義に過ごせる居場所となったことが窺えた。

3. ノンフォーマルな教育機関

下記のような理由から、プロジェクトの上位目標である難民の知識、態度、技能の向上・改善に、図書館は貢献していると考えられる。

まず、知識については、「キャンプの外の世界についての情報が得られた」、「キャンプで役に立つ知識（保健、女性の権利など）を得ることができた」、「カレン人の歴史について知識を得ることができた」といった点を受益者はあげている。次に、態度については、「大人も子どもも読書の習慣が身についた」、「親子の会話が増えた」、「年上の対する尊敬の念を養った」、「子ども同士のつながりが深まった」、「子どもたちが開放的になった」、「親が教育の重要性を認識するようになった」、「思考力・想像力が向上した」といった点があげられた。さらに、技能については、「子どもの質問する能力が高まった」、「語彙力、読み書きの力がついた」といった点があげられた。

また、各ステークホルダー（事業関係者）から寄せられた回答によると、図書館は学校以外の教育機会を提供しているといった点も認識されていることが分かる。例えば、図書館は折り紙やおえかき、ゲーム、おはなしといった子ども中心型の学習の機会を子どもたちに提供している。子どもたちも、図書館で行われている文化学習活動はすべて楽しいと答えている。つまり、キャンプ内に新しいノンフォーマルな教育の機関が増えたと難民は認識していると言える。この点は、中学生が学校で習ったことでわからなかったことを図書館の本で調べられるようになったと答えていることや教員が図書館の本を授業に活用していることからうかがえる。

4. 他の住民組織、援助機関への影響

ヒアリングの結果から、保育園の教員に対するおはなしや文化活動の研修や保育園への移動図書館活動は、難民キャンプの保育園委員会や保育園を支援している NGO から評価されていることが分かった。保育園教員はおはなしを保育活動にとりいれており、幼児はおはなしが好きだというコメントがあった。

また SVA が供与した図書のうち布絵本は、他の NGO が支援している障害児教育事業で利用されていること、図書館の書架のデザインを他の NGO が支援する教育センター（難民キャンプの住民組織のひとつである教育委員会が運営する教材・教員研修施設）の書架に応用されていること、からも他の住民組織や援助機関に良い影響を与えていることがうかがえた。

改善すべき点と提言

1. 蔵書数の増加

蔵書数が少ないという問題は、2つのキャンプの共通した課題であった。成人からはスポーツ、ニュース、世界情勢、健康、宗教、識字用教材についての本を増やして欲しい、カレン語の本を増やして欲しい、雑誌を増やしてほしいといった要望がだされた。子どもからは、語学（英語）、教科関連の読本がほしいといった要望がだされた。

人気のある本は複本の数を増やす、キャンプ内外（海外含む）でカレン語の本を持っている人を探しコピーさせてもらう、ラングーン（ヤンゴン）まで本の買出しにいく、カレンの民話やター（詩）を古老から聞き取りする、謄写版でのキャンプ内で独自に新聞を発行するといった提案がなされた。

2. 運営、利用方法の改善

「利用時間を長くして欲しい」、「厚い本や教育関係の本の貸し出し日数を長くして欲しい」、「他の図書館から借りることができるようにして欲しい」、「図書館数および図書館員数を増やして欲しい」、「他の住民組織（キャン

ブ委員会、教育委員会、校長会議)との協力関係の強化」、「図書館への無関心層(特に成人男性)に関心をもってもらうための対策」、「図書を分類法に基づいて配架する」、「新たに入荷した本をキャンプのスピーカーを使って告知する」、「本の喪失を減らすためにセクションリーダーを通じてキャンプ住民に徹底する」、といった意見や要望が出された。

3. 大人向けの活動の充実

今後の大人向けの活動としては、ディベートやスピーチコンテスト、舞踊教室、音楽楽器教室、カレン作家による図書の制作(コピーでよい)、ハーブ薬草についてのエッセイコンテストの開催、といった活動が提案された。

4. 子ども向けの活動の充実

今後の子ども向けの活動としては、ボードゲーム(パズル、すごろくなど)、おもちゃを増やして欲しい、工作をもっと教えて欲しい、絵本創作コンテストの開催、ター(カレン人の詩)の朗読教室を開く、人形劇のワークショップを開く、といった活動が提案された。

5. 持続可能性の保障

持続可能性を保障するためにカレン教育局が今後運営に積極的に関わっていけるように、同局に働きかけてはどうかという示唆を他の援助機関からいただいた。難民の帰還後、同局の指導者たちは、カレン州における教育行政職員となるため、彼らの役割が重要となるためである。

(3) 評価データ

メコンカ・キャンプ

グループインタビュー結果

ステークホルダー(事業関係者)	よかった点	改善すべき点	その他のコメント
1. キャンプ委員会	子どもから大人まで誰でも参加できる場所 時間を有意義に過ごせる場所 本を通して外の社会や世界の様子を知ることができる 親子関係を築く機会となった	キャンプ委員会、図書館委員会、教育委員会の協力関係を更に深めてほしい 本をもっと増やしてほしい 子どもの知識・経験が更に向上するような活動を作り上げて行ってほしい	図書館活動をずっと続けてほしい 図書館を活用してもらって、地域の立派なリーダーになってもらいたい
2. 教育委員会	これまでにない教育の場が提供できた 子どもたちのつながりがより深まった 教育を受ける機会が増えた 親が教育の重要性を認識するようになった	雨季は水害が増えて図書館にこないところがあるので、図書館を2カ所ぐらい増やしてほしい(セクション7, 8, 11) 蔵書を増やす 絵本に英語訳も貼る 大人向けのコンペもやってほしい	一般的知識や教養を得る第一ステップとして望ましい セクション会議などで請う方活動を実施してきた キャンプ委員会や教育委員会のネットワークが強化された

	子どもたちが開放的になった 先生たちが学校教育に活用した(おはなし、歴史、地理、語学、家畜の育て方など)	子どもの作文や絵本を日本に紹介して欲しい 女性グループの識字改善にもっと協力して欲しい	
3. 教員	読み聞かせは子どもたちの想像力や質問する力を育て、またその後自分で本を読もうとする意思につながっている。 絵本はまだ見たことのない世界をより現実的に把握することに貢献している。 図書館のサービスの方法から学んでいる。	もっと本の種類を増やしてほしい。 図書館自体をもっと増やしてほしい。	図書館員を小学校に派遣して読み聞かせなどのサービスをしてはどうか(移動図書館員)。 文化活動の種類をもっと増やせるだろうか。
4. 大人	情報や知識が多く入るようになった 余暇が利用できるようになった 大人も子どもも読書への関心が高まった 字が読めない人も来て絵本をみるようになった 親子の会話が増えた 新しい教育の場が増えた	貸出期間の延長をして欲しい(厚い本のみ) 蔵書を増やして欲しい小説、他国の本、健康や宗教に関する本など 図書館の周りにプレイグランドを作って欲しい 歌やおどりなどの文化活動を増やして欲しい(カレンの文化以外でも可)	子どもたちの未来が開ける場になって欲しい リーダー担って助け合っていけるような大人になって欲しい(子どもへの願い)
5. NGO	毎日100人以上の子どもたちが利用している	全体的に図書が不足で、特に大人用の本が足りない	短期的には英語図書が大事だが、長期的にはビルマ語図書の重要性が高くなるだろう
	カレン語の翻訳を付けているのもとてもよい 学校以外に何も無かった子どもたちの放課後に新しい機会を与えた 本の扱い方を学ぶことで子どもによりしつけができる 学校教育で扱っていない重要な教育プログラムを楽しんでいる 図書館の構造がとてもいい。書架のデザインがいいので ZOA が教育センターに応用した	カレン人の作家による図書を作ってはどうか～まずコピーで冊子を作ってもいい 文化・文芸雑誌を入れることができるか(ミャンマー国内でカレン語雑誌が1冊だけ発行されている) 女性の識字テキスト(育児、料理、など)をそろえてはどうか 子どもたちのためにキャンプ内で作ったおもちゃなどと活用できないか 絵画コンテストの開催 他の NGO との協力でもっといろいろな活動ができるはず 2ヶ月に1回の学校長会議で新たな協力関係を訴えては	彼らは帰国した時のためにビルマ語を学ぶことをかなり真剣に考えている 関心の無い人たちをいかに巻き込むか(特に大人の男性)

図書館委員会・図書館員評価ワークショップ結果

改善すべき課題	行動計画
1. 成人向けのカレン語の本が少ない	1. 人気のあるタイトルの冊数を増やす 2. カレン語の本を持っているキャンプ住民を探す 3. ランゲーンでカレン語の本を探す 4. Karen Information Center(メーソット)に聞く

	<p>5. 海外に住んでいるカレン人に本の提供をお願いする</p> <p>6. カレンの民話を集める</p> <p>7. カレンの詩(ター)を集める</p>
2. 文化活動が少ない	<p>1. 詩(ター)の朗読教室を開く</p> <p>2. 人形劇のワークショップを実施する</p>
3. 靴がなくなる	1. 掲示板に注意書きをする
4. 図書館の利用者を増やす	1. 入荷した本の告知をスピーカーでアナウンスする
5. 本がなくなる	1. 図書館利用のルールをセクションのリーダーを通じて普及する

ウンピラム・キャンプ

グループインタビュー結果

ステークホルダー(事業関係者)	よい点	改善すべき点	その他のコメント
1.教育委員会	<p>子どもと大人たちが知識・経験を得る機会が増えた</p> <p>思考力が増えた</p> <p>子どもが自由な時間を有効に使えるようになった</p> <p>また自由な時間に利用できる場所が出来た(子どもにとってはとても重要とのこと)</p>	<p>子ども及び大人向けの本をもっと増やして欲しい(例:スポーツニュースや政治情報、宗教についての本など)</p> <p>図書館の利用時間を今よりも長くしてほしい</p> <p>大人向けの活動をもっと行ってほしい(例:ディベートやスピーチコンテストなど)</p>	建物と図書館員の数を増やしてほしい
2.教員	<p>絵本から子どもたちは年上に対する尊敬の念や態度を養う</p> <p>子どもたちの語彙が豊富になる</p> <p>読み聞かせの後、子どもたちが積極的に質問したり、また違う話を聞きたいと表現する</p> <p>絵本はとりわけ幼児期の子どもたちにとって重要である</p>	<p>厚い本や教育関係の本の貸し出し日数は3日間から5日間にしてほしい</p> <p>夕方5~8時の間も開館してほしい。</p> <p>大人用の本を増やして欲しい</p> <p>大人用の談話室を作ってほしい</p>	<p>生徒は歌の授業に関心が低いですが、図書館員にサポートして欲しい</p> <p>他団体の発行する冊子も図書館に置いてはどうか</p> <p>キャンプ内で出版活動を行えないか</p>
3.大人	<p>知識を得る機会が増えた(例:雑誌を通じて健康、女性、コミュニティ内のことなど)</p> <p>子どもたちの読書力が高まった</p> <p>外の社会とキャンプ内の社会について比較することができた</p>	<p>大人向けの本をもっと増やしてほしい(小説、新聞、雑誌など)</p> <p>貸し出しの日程を3日間よりも長くしてほしい</p> <p>大人向けの文化活動(舞踊教室など)も行ってほしい</p>	子どもたちが図書館に通い、よい本を読んで、良いリーダー、また社会に役立つ人間になっていくことを願う
4.子ども	<p>小学生</p> <p>図書館で行なわれている文化活動はすべて楽しい。</p>	<p>もっと多くのカレン語の絵本の配布を希望。</p>	特になし

	<p>絵本からは多くの知識と言葉を知った。わからない言葉は図書館員が教えてくれる。</p> <p>館内のデコレーションも素晴らしい。</p> <p>中学生</p>	<p>ゲームも増やして欲しい(パズル、すごろく、縄跳びなど)。</p>	
	<p>学校で習ったことでわからなかったことを本で調べられるようになった。</p> <p>カレンの歴史をカレン語で読むことはうれしいことだ。</p> <p>高校生</p>	<p>貸出期間をもっと長くしてほしい。語学学習の本(英語)を増やして欲しい。</p>	特になし
	<p>知識が得られるのでうれしい</p>	<p>教科に関連がある様々な分野の本を増やしてほしい</p> <p>工作などもっと教えてもらい、部屋を楽しい雰囲気にしたい</p> <p>読みたい本購入したり、他の図書館から借りたりするサービスが欲しい</p>	特になし
5.NGO	<p>他団体との協力で出版や研修などを行っている</p> <p>ストーリーテリングや人形作りはとても役に立った</p> <p>SVA の図書館からキャンプの図書館への移行している</p> <p>幼稚園教員と子どもたちはおはなしがとっても好きだ</p> <p>教材などは他のキャンプの障害児教育プログラムにも応用できる</p>	<p>SVA はキャンプ外の移住民の学校に移動図書館サービスなどできるか</p> <p>カレン教育局が今後運営の責任を追っていけるようにできるかどうか</p>	

図書館委員会・図書館員評価ワークショップ結果

改善すべき課題	行動計画
1. 蔵書が少ない	1. もっと雑誌を買う 2. 子どもを対象に絵本コンテストを実施する 3. 成人対象にハーブ薬草についてのエッセイコンテストを実施する 4. カレン語、ビルマ語の教養図書を買う
2. 文化活動がすくない	1. 伝統舞踊教室を開く 2. 伝統楽器教室を開く 3. 子ども対象におはなしコンテストを実施する 4. 成人対象に伝統楽器演奏コンテストを実施する
3. 本がなくなる	1. 図書の配架を分類法に基づいたものにする 2. 新聞を謄写版で印刷する

3 . 中間評価報告

(1) メコンカ・キャンプ図書館事業中間評価報告書

2001 年 11 月

報告者: SVA メーサリアン事務所
図書館活動専門家 渡辺 有理子
前所長 三宅隆史

評価方法

1-1 背景と対象、目的

SVA は2000年9月にビルマ(ミャンマー)難民支援事業をメーホンソン県メーサリアン郡メコンカ・キャンプおよびソブモイ郡メラマルアン・キャンプを対象に活動を開始した。事務所の設置、現地職員の雇用、供与する本の調達・翻訳・製作、図書館の運営組織である図書館委員会の設立、図書館の建設、図書館員の養成といった図書館開館のための準備期間の6カ月を経て、2001年3月にメコンカ・キャンプに三館のキャンプ図書館(コミュニティ図書館)を開館した。開館後6カ月が過ぎ、図書館員にたいする基本的な図書館活動に必要とされる技能指導を完了したため、中間評価調査を行うことにした。

本評価調査は中間評価であることおよび時間および資金の制約から内部評価とし、DAC 評価5項目のうち効率性と目標達成度、インパクトを評価項目とした。そして図書館活動の問題点、課題を明らかにして、今後の活動の改善および修正に役立てることを目的とした。本計画は、3年間の事業であることから、妥当性、自立発展性を含む評価については、終了時前(2003年6月頃)に実施する予定である。

評価の対象は、メコンカ・キャンプのすべての図書館(第一、第二、第三図書館)を対象とした。キャンプの人口および各図書館の対象セクションの人口は、添付資料の表 1および表 - 2の通り。

1-2 調査方法と限界、調査実施期間

児童、成人、教員を無作為に抽出してインフォーマントとした。児童については、調査日に来館していた児童30名~50名を対象に、年齢ごとにグループに分け、色紙の紙片を質問ごとに回答用紙の上に置くという方法を含むグループインタビューを行った。成人については各館の利用者約25名へのアンケート調査を行った。また月ごとの利用者数表、図書貸出記録、利用者登録記録、図書登録記録の分析を行った。教員については、キャンプ内のすべての保育園、小学校を対象に各校の教員2名ずつにアンケート調査を行った。図書館員に対しては、すべての図書館員へのアンケート、図書館員日誌の分析、インタビューを行った。

調査の立案、実施、分析は、当会メーサリアン事務所のスタッフである所長の三宅隆史、図書館活動専門家の渡辺有理子、アシスタントコーディネーターの Malweekarn Rithiwongsakul、Sakdar、Mulapi Rawiroong が行った。実施プロセスには、図書館員が参加・協力した。また教員を対象とするアンケート調査にあたっては、学校委員会および保育園委員会が協力した。しかしながら、時間の制約のためならびに雨期のためキャンプへのアクセスが悪いため、調査方法および質問事項についての検討を図書館委員会および図書館員と協議することができなかった。このことは、カウンターパートおよび受益者の評価プロセスへの参加を高めることができなかったという点で次回の評価を行う際の課題である。調査期間は、2001年

10月～11月であった。

・調査結果

1 児童の利用者

1-1 図書館へのアクセス

保育園児については、4歳および5歳の保育園児童のうち、49%が図書館を利用している。図書館のあるセクションの利用率は、69%であるのに対して、図書館のあるセクション以外のセクションに居住する保育園児の利用率は、35%と大きな差がある。特にセクション7の保育園児は図書館を1名も利用していない。保育園児にとっては離れた図書館に通うことは困難なためであろう。モバイル(移動図書館活動)の必要性が高いことが裏付けられる。

小学校児童については58%が図書館を利用している。保育園児と同様に、図書館のあるセクションの小学生の利用率が83%であるのに対して、図書館のないセクションの利用率は、45%と下がる。特にセクション7および8の利用率が低い。

保育園、小学校ともに、セクション7および8に対して、モバイルに力を入れる必要がある。

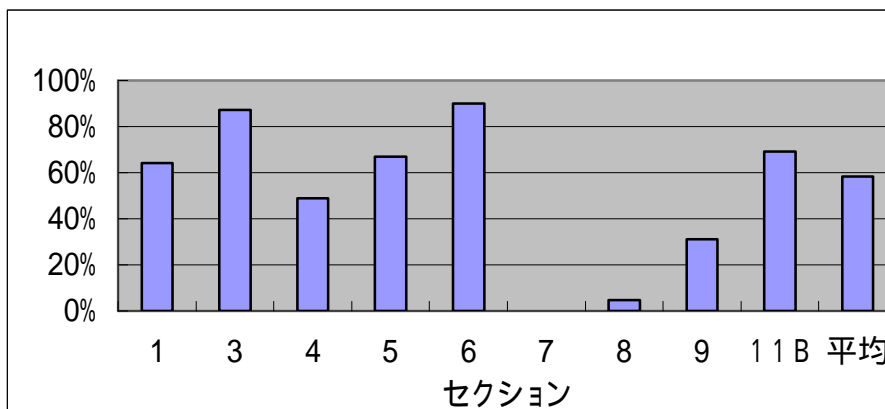


表 - 1 小学生児童のセクション別図書館利用率

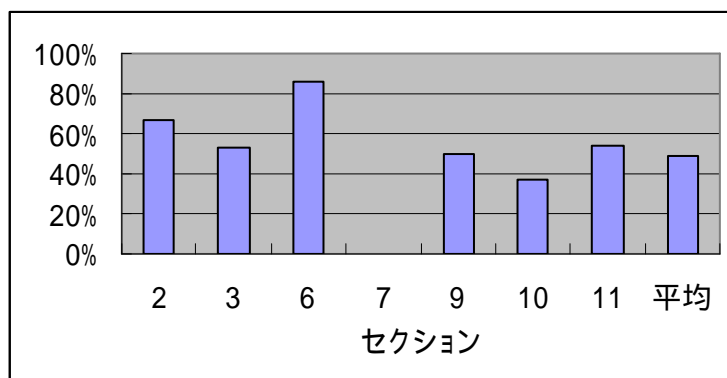
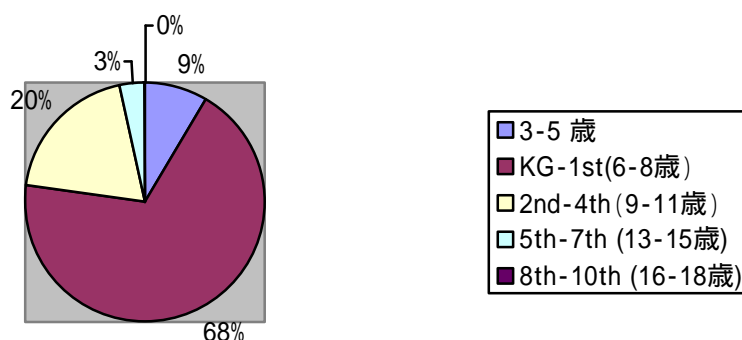


表 2 保育園児童のセクション別図書館利用率

子どもが図書館に行かないと答えた親の大半は、図書館が自宅から遠いことをあげており、「行かない」というよりも「行きたくとも子どもの足では行けない」ということが主な理由であった。また、乳幼児には絵本は必要ではないと考えている親もおり、図書館へは字が読めるようになってから、という意識がみられる。しかし、

親は比較的、児童がどのくらいの頻度で図書館へ足を運んでいるのかを理解しており、児童が両親に話をしているか、または家に姿が見えないときは、図書館に行っているであろうとみなしているか、来館頻度の把握理由は定かではない。



1-2 利用者の年齢層

レセプション・センター近くに位置する第2図書館では、10歳以上の児童であっても、学校に初めて通う児童は、KGレベルから第1学年に通っている児童が多い。したがって、第2学年以上に該当する児童はいなかった¹。

児童の利用者の9割は小学生で、このうちKGレベルから1st standardが7割を占めている²。15歳以上の生徒の利用者はほとんど見られない。10代後半の利用者を増やすことは課題である。この年齢層は図書館でおこなわれる児童向けの活動への参加よりも、大人の部屋の書籍や学習用の辞書などの利用者として来館しているものと思われる。

2.1.2. 利用者の居住セクション

図書館名とセクション	セクション No.	3-5 歳	KG-1 st	2 nd -4 th	5 th -7 th (13-15歳)	計	%	総計
第1図書館	1	0	1	1		2	4.4	
	2	8	22	8		38	84.4	

¹ ニュー・アライバル（新しく難民キャンプに到着した人）は、タイ政府による受入承認(Admission)が終了するまでの間、レセプション・センターで生活するものとされている。

² キャンプでの学制は、ビルマと同じく6歳から小学校の就学年齢（5歳までは保育園）となり、KG-B、KG-Aと進む。その後、1st standardから4th standardまでが小学校である。学年毎に進級試験がある。

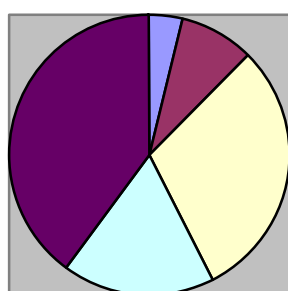
(第2セクション)	3	0	3	2		5	11.1	45
	4	0	0	0		0	0	
第2図書館 (第6セクション)	5	0	0			0	0	72
	6	8	63			71	98.6	
	7		1			1	1.4	
第3図書館 (第11セクション)	8					0	0	72
	9					0	0	
	10		1	1		2	2.8	
	11	2	31	20	6	59	81.9	
	12		7	4		11	15.3	

それぞれの図書館が建築されているセクションに居住する児童が来館者の88.3%を占めており、他のセクションの児童は激減、または皆無の状態である。図書館まで児童が徒歩で来館するには、かなりの距離があることが原因の一つである。これまでのSVAの経験から、一般的に15分以内で歩ける距離(他に交通手段はない)でなければ、児童は図書館に来ないとされているため、図書館の建設場所は、最大で約20分かかる場所を選定したのであるが、この調査結果は、予想を大きく上回り、図書館から離れている地域に居住する児童は、図書館にほとんど来ていないことが明らかになった。図書館の本をモバイル(移動図書館)で2週間から1カ月間の期間、保育園および小学校に貸し出し、図書館に来ることのできない児童にも本と出会う機会を提供している。モバイルの重要性が調査結果から確認された。

また、5歳以下の児童および乳幼児については、父母または兄弟と共に来館しなければ図書館まで自主的に来ることにはできない。

1-3 来館頻度

	3-5歳	KG-1 st	2 nd -4 th	5 th -7 th (13-15歳)	計	%
月に1回	1	6	0	0	7	3.8
2週間に1回	1	12	3	0	16	8.7
1週間に1、2回	1	43	11	0	55	30.0
1週間に3、4回	2	22	8	6	32	17.5
開館している日は毎日	13	45	15	0	73	39.9



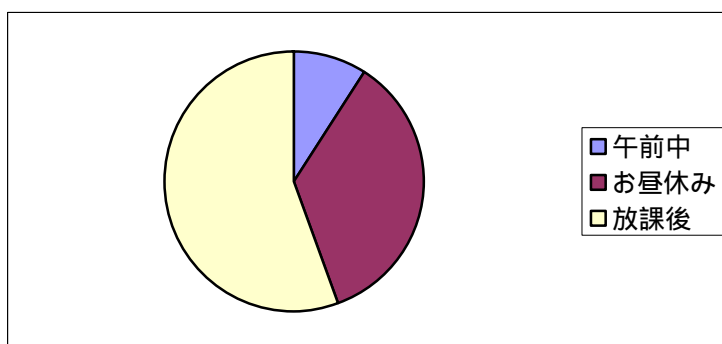
■ 月に1回
■ 2週間に1回
■ 1週間に1、2回
■ 1週間に3、4回
■ 開館している日は毎日

調査対象児童のうち、9割弱が週に1回以上、4割は毎日来館している。このデータは、必ずしも児童の多くが図書館を利用していることを意味するものではないが、利用者の多くはリピーターであることを意味している。3歳から第4学年の児童の大半は、一週間のうちに数回から毎日図書館を来館している。この年齢層にとっては、図書館が気軽に訪問することのできる場として定着しつつあることを示しており、図書館でお

こなわれているさまざまな文化活動へも積極的に参加していることを表している。これまで児童は路地や狭い空間でのビー球遊びや虫取りや空き地でのスポーツ(タクロー、サッカー、バレーボール)など、自分たちで遊びを工夫して時間をすごしており、キャンプの中に児童が自由に集まることのできる屋内場というのは今回建設された図書館がはじめてである。文化・余暇の機会を提供する子どもの居場所として図書館は機能していることが伺える。

1-4 来館する時間帯(複数回答可)

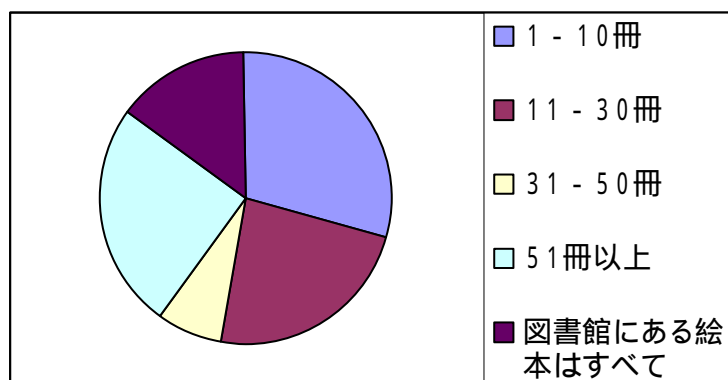
	3-5 歳	KG-1 st	2 nd -4 th	5 th -7 th (13-15歳)	計	%
午前中	3	7	5	5	20	9.1
お昼休み	3	41	28	6	78	35.4
放課後	15	65	37	5	122	55.5



児童の大半は学校が終わる3時以降の放課後に図書館へ来館している。基本的に学校のかばんを持参してこないように図書館員が説明をしているため、一度帰宅してからあらためて来ているようだ。また、お昼休みの短時間の間にも、図書館で過ごす児童が多く、この点からも時間のあるときに児童が来やすい場となっていることがわかる。

1-5 これまでに図書館で自分で読んだ本のタイトル数

冊数	3-5 歳	KG-1 st	2 nd -4 th	5 th -7 th (13-15歳)	合計	%
1 - 10冊	-	36	7	6	49	29.5
11 - 30冊	-	35	3	-	38	22.9
31 - 50冊	-	10	2	-	12	7.2
51冊以上	-	34	8	-	42	25.3
図書館にある絵本はすべて	-	8	17	-	25	15.1



図書館では連日図書館員による絵本の読み聞かせがおこなわれているため、この半年間で児童は図書館にある絵本(SVA 提供の57タイトル)に関しては、ほとんど内容については理解している。しかし、「自分自身で読んだ本」となると、まだまだ文字を読むことが困難な児童もあり、すべての本を読める児童が増えるのは、第2学年以上というのが現状である。むしろ、KG レベルから第1学年の児童は、図書館員の読み聞かせにより耳から話の内容を記憶しており、絵本の内容を素話できる児童が増えている。児童の4割が、50タイトル以上の本を既に読み終わっていることから、本の追加供与の必要性が伺える。

1-6 図書館でおこなわれる文化活動のなかで好きな活動(一人以下から3つ選択)

絵本の読み聞かせ すばなし ペープサート 紙芝居 布の絵本 磁石での魚釣り
 ゲーム 手遊びと歌 工作 おりがみ お絵かき 他の活動

図書館名	ベスト3	KG-1 st	2 nd -4 th	5 th -7 th (13-15歳)
第1図書館	第1位	布の絵本	お絵かき	
	第2位	すばなし	布の絵本	
	第3位	読み聞かせ	手遊びと歌	
第2図書館	第1位	布の絵本		
	第2位	ペープサート		
	第3位	工作		-
第3図書館	第1位	ペープサート	紙芝居	お絵かき
	第2位	紙芝居	ペープサート	磁石での釣り
	第3位	布の絵本	読み聞かせ	すばなし

児童は日常的な絵本の読み聞かせのほかに、週に数回おこなわれるさまざまな文化活動を非常に楽しみにしているが、これは年齢と個々の興味によって異なっている。しかし、全体的には素材そのものに動きのある活動(布の絵本、ペープサートなど)を好む傾向がみられる。また、高学年になるにつれて絵を描くことの楽しさを、より児童への絵画の指導が今後必要とされるところである。活動のなかでも比較的回数も多くおこなわれている折り紙の活動に関しては、低学年の児童でも容易に折れる作品を増やしていくことが課題であり、大勢の子どもたちが参加している場合に、図書館員の指導がすべての児童に行き渡りにくいの現状である。

1-7 図書館にある絵本のうち、もっとも好きな絵本とその理由(一人3点選択)

<p>第1位:『あかずきんちゃん』 (主な理由)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵がとてもきれいで、主人公の女の子が愛らしい ・きれいな花をたくさん摘み、ぶらんこで遊んでいるのが楽しそう。やってみたい。 ・最後に悪いおおかみが退治されてほっとした。
<p>第2位:『ひとまねこざる』 H・A・レイ 作 (主な理由)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・好奇心いっぱいの主人公のざるがおもしろくて、大好きだ。 ・絵がとても楽しい。 ・壁じゅうにらくがきをするのが楽しそう。ぼくもやってみたい。
<p>第3位:『ながぐつをはいたネコ』 ポール・ガルドン作 (主な理由)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネコが明るい性格でとても賢いのが気に入っている ・ネコのはいている赤いながぐつがとてもすてき。 ・絵もストーリーも大好き。人間の王様をネコが助けるなんてとてもおもしろい。
<p>第4位:『ぐりとぐら』 中川李枝子 文・山脇百合子 絵 (主な理由)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぐりとぐらがお互いに仲良しでとてもいい。着ている服もとてもきれい ・さいごに卵の殻を使って車をつくるなんてすごい発想だ。 ・みんなにホットケーキをわけてあげるのは、とても平和な感じがする
<p>第5位:『スーホの白い馬』 モンゴル民話・赤羽末吉 絵 (主な理由)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストーリーも絵もとても気に入っている ・スーホは動物が好きで、動物たちはスーホが好き。どちらも非常にいい関係だと思う。 ・馬のレースでスーホが勝つのは嬉しい。スーホが好きだから。

児童はお話の主人公に自分自身を重ねて内容を楽しんでおり、自分でやってみたいことや憧れていることを実行してくれている主人公を好んでいるようだ。キャンプに来るまでの心理的トラウマおよび難民キャンプの閉塞感から自由に主人公が活躍する本や広い草原が舞台になっている本といった子どもの想像力をかきたてる本が子どもたちの心に響くのであろう。また、主人公が知恵をしばり困難をのりこえる展開や、工夫をこらして現状以上に生活を楽しむ作品が支持されている。しかし、全般的には世界中の子どもたちに長い年月読み継がれている絵本は、どのような環境の子どもたちにたいしても人気が高く普遍性があり、何度もくりかえし読まれているということの実証ともなった。

また、翻訳の時点で問題とされた、難民キャンプと異なる生活習慣や環境の本についても、児童は異なる文化を楽しみ、細部のことよりもお話全体の楽しさを重視しており、新しい世界に出会う機会となっている。

2 成人の利用者

2-1 登録者数

男女比

	女性登録者数	男性登録者数	全登録者数
第1図書館	75	120	195
第2図書館	122	101	223
第3図書館	98	136	234
合計	295	357	652
%	45.2	54.8	

2001年9月末現在

居住セクション

第1図書館			第2図書館			第3図書館		
セクション	登録者数	登録者数に占める割合	セクション	登録者数	登録者数に占める割合	セクション	登録者数	登録者数に占める割合
	101	51.8%	1	3	1.3%	7	16	6.8%
2	44	22.6%	4	16	7.2%	8	10	4.3%
3	33	16.9%	5	58	26.0%	9	14	6.0%
4	11	5.6%	6	88	39.5%	10	34	14.5%
5	3	1.5%	7	31	13.9%	11	140	59.8%
6	2	1.0%	8	21	9.4%	12	14	6.0%
その他	1	0.5%	9	4	1.8%	13	3	1.3%
			11	1	0.4%	不明	3	1.3%
			12	1	0.4%			
合計	195			223			234	

*黄色部分は、図書館の設置されたセクションをさす。2001年9月末現在

以外に男性の利用者数が女性を上回っている。全キャンプ人口のうち登録者の占める割合は、平均で4.4%なので、100人のうち4人しか図書館を利用していない。図書館の位置するセクションと同じセクションに住む利用者が2割から6割を占めている。図書館の設置されているセクションでの居住者に占める登録者の割合は、第一図書館が7.9%、第二図書館が5.1%、第三図書館が6.9%である。

2-2 図書館への来館頻度

	月に1回以下	月に一回	2週間に1回	1週間に1回	1週に数回
第1図書館	4	1	3	10	7
第2図書館	0	2	1	5	17
第3図書館	3	3	7	12	3
合計	7	6	11	27	27

%	9.0	7.8	14.3	35.1	35.1
---	-----	-----	------	------	------

児童を対象とした調査方法と同様に、利用者を対象に不作為にサンプルとして実施した調査なので、このデータは住民全体の図書館への利用頻度を表しているものではない。しかしながら、大人の来館者も週に1回から数回は来館している。このことから、利用者の多くはリピーターとなっていることがわかる。また、一人では来ることのできない乳幼児をつれて来館している父母も多い。キャンプの中では仕事についていない大人が大半を占めるため、平日からの来館が可能である点と、児童書に比べて定期的に新しいビルマ語の本を購入して配架していることから、比較的来館頻度は高い。

2-3 図書館で書籍を借りた経験の有無

	YES	NO	無回答
第1図書館	23	1	1
第2図書館	25	2	1
第3図書館	25	1	1

成人のほとんどは、書籍を借りるために来館している。

2-4 本のニーズ

各館における貸出し頻度の高い本ベスト5

図書館名	書名	貸出頻度	言語	分類
第1図書館	1. Naw Thaw Rai Saw They la Paw	13	K	小説
	2. Three stars & elephant stars	12	K	小説
	3. Home Magazine	12	K	雑誌
	4. Comedy story	11	B	コメディ
	5. Yalsayal	11	B	雑誌
第2図書館	1. Tha Khee ta ma khee	27	B	小説
	2. Our new electricity	25	B	電気
	3. Short Mayamar word	22	B	小説
	4. Earth quake	17	B	地震
	5. Word enemy	16	B	小説
第3図書館	1. Home magazine	21	K	雑誌
	2. Karen group Magazine	18	K	雑誌
	3. Home magazine 2	16	K	雑誌
	4. Karen people No2	15	K	歴史書
	5. Film star	13	B	雑誌

注)K カレン語 B ビルマ語

● 人気のある本

図書館名	書名	言語	分類
第1図書館	1. Karen history	K	歴史
	2. Burmese magazine	B	雑誌
	3. Karen magazine	K	雑誌
	4. Three star and elephant	K	小説
	5. Home magazine	K	雑誌
第2図書館	1. Kleh ser	K	小説
	2. Home Magazine	K	雑誌
	3. Ta teh ter pyo	K	小説
	4. Tree star and elephant	K	小説
	5. Tee ru kaw the who treh	K	雑誌
第3図書館	1. Political book	K	雑誌
	2. Famous person in the World	B	
	3. Home magazine	K	雑誌
	4. Karen History	K	歴史
	5. Three star and elephant	K	小説

注)K カレン語 B ビルマ語

全体的にカレン語またはビルマ語の雑誌が、貸出しおよび人気の高い本となっており、日頃から一冊あたりの雑誌の冊数を増やして欲しいという要望の高いことが理解できる結果となった。また、貸出し利用頻度はビルマ語とカレン語の本が半々を占めているが、この貸出し利用頻度とは別に、人気の面から調べると、上の表のようにカレン語の本が上位をほとんど占めており、貸出し頻度の高い本と、人気がある本とは必ずしも一致していない。

2-5 今後購読したい本の分野

カレン語	カレンの歴史書、小説、雑誌、カレンの民話、カレンの冗談話、カレンの詩
ビルマ語	小説、雑誌、ビルマ語を学ぶ本、
英語	容易な英語の本、物語、英語学習の本
その他	海外のニュース、人権の本(子ども・女性)、知識本、政治の本、農業の本、健康についての本、料理裁縫、地図帳、絵本、マンガ、タイのお話、科学書、伝記、教育学、算数の指導書、 有名人の本、世界史、動物の本、環境の本、技術書、道徳の本、バンコクポスト

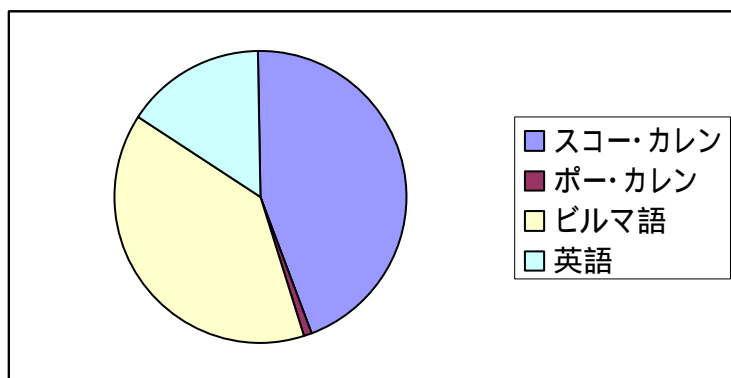
注)太字は要望が5名以上の本

現在、ビルマ語の本に関してはタイ ビルマ間の国境の町、メーソット(タイ側)の書店から購入しているが、カレン語に関しては出版されている本が非常に限られており、要望が高くとも希望どおりに提供できないのが現状である。また、キャンプの中では海外のニュースを求める声が高いことも今回の調査で判明した。今後どのよなかたちでその要望に答えられることができるのかは検討を要する。人権の本については、「子どもの権利条約」の本の出版を今年度は予定しており、各図書館に配布できるであろう。

その他の分野については、移転後のメーソットおよびビルマ国内での出版状況を把握し、購入が可能であるかどうか調査を要する。

2-6 読みたい本の使用言語(複数回答可)

	スコー・カレン	ポー・カレン	ビルマ語	英語
第1図書館	16	0	16	1
第2図書館	20	0	15	6
第3図書館	26	1	24	15
合計	62	1	55	22
%	44.3	0.7	39.3	15.7



各図書館ともに、スコーカレン語とビルマ語の本を中心に借り出されている。これは、スコーカレンの人はポーカレン語を話すことはできないが、ポーカレンの人たちの多くはスコーカレン語を話すことが可能なため、少数のポーカレンの人たちも、スコーカレン、またはビルマ語の本を借りているようだ。実際、図書館に配架されているカレン語の本は、99%スコーカレン語の本である。

2-7 家庭での子どもの保有数と人数(アンケート回答者80人中)

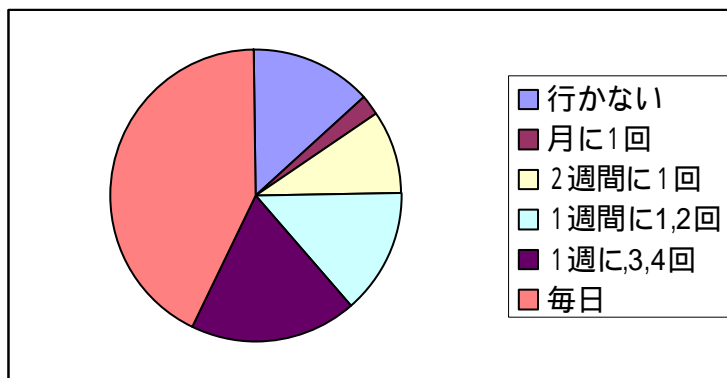
	人	%
扶養児童がいる	44	55
扶養児童がいない	36	45

世帯あたりの扶養児童数	3.1人
扶養児童の最大数(61歳男性)	8人(32,30,28,26,24,18,14,11歳)

メコンカ・キャンプの世帯あたりの人数の平均は6.2名である。調査回答者の約半数が家庭で平均3人の子供を育てている。が、おそらくキャンプ全体の平均扶養児童数は若干高いと推測される。子どもが多い母親は家事や乳幼児の世話に時間を割かれ、図書館に来館する時間がもてにくいからである。

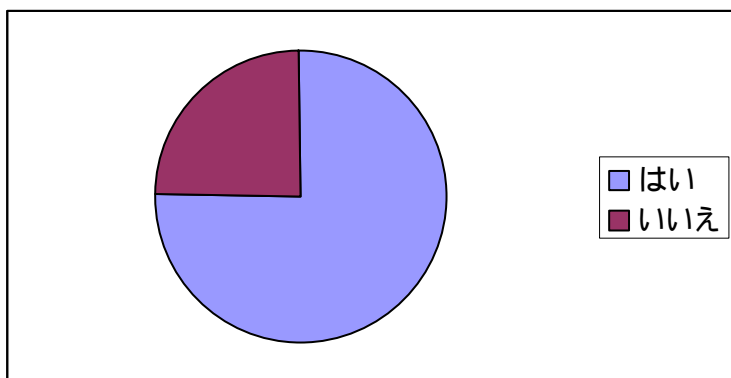
2-8 自分の子どもが図書館へ行く頻度(子どものいる人のみ回答)

	行かない	月に1回	2週間に1回	1週間に1,2回	1週に,3,4回	毎日
第1図書館	3	0	2	3	4	2
第2図書館	2	1	1	1	1	3
第3図書館	1	0	1	2	3	14
合計	6	1	4	6	8	19
%	13.6	2.3	9.1	13.6	18.2	43.2



2-9 子どもが自宅で図書館や本について話すのを聞いたことがありますか？

	はい	いいえ
第1図書館	8	7
第2図書館	4	1
第3図書館	15	1
合計	27	9
%	75	25



4分の3の子どもが図書館で読んだり、聞いたりした本やおはなしについて家庭で話している。これは、図書館活動の肯定的なインパクトを示しているといえる。

2-10 子どもたちは図書館ができたことで何か変化がみられますか？

<知識・技能について>

・理解力と話す能力が高まった。(27・女)

- ・読む力と聞く力が高まった。(49・男性)
- ・読むことが好きになり想像力がついた。私たちにもお話をリクエストするようになった。(33・女性)
- ・たくさんの本を読みたがっており、向学心が芽生えた。(37・女)
- ・読むのが早くなり、フレーズごとに止まらず声をだしてすらすらと読めるようになった。(25・男)
- ・話す力がつき、図書館員に読んでもらったお話を家で話してくれる。(30・女)
- ・異文化についての知識が増えた。
- ・絵を書く能力がついた(49・男性)

<態度について>

- ・自分の生活や人生について考えるようになった(42・男)
- ・以前よりもずっと丁寧な言葉遣いができるようになった(33・男)
- ・きれい好きになった(女)
- ・友だちとの関係づくりがうまくなった。さらなる知識向上を願う。(42・男)
- ・図書館で新しい知識を学び、家での振る舞いも非常によくなった(23・男性)
- ・親に多くの質問をしてくるようになった(54・男)
- ・両親や目上の人に毎朝あいさつをきちんとできるようになった(女)
- ・両親の言うことをきちんと聞けるようになり、学校へ行くことも勉強することもたのしそうだ。

<その他>

- ・今まで行くところがなかったが、図書館で時間をすごすようになった。(38・女)
- ・図書館ができたおかげで、放課後はいつも図書館へ行き、他の遊びをしなくなった(28・女)
- ・子どもたちは話を聞くことも、絵本の絵を見ることも大好きだ(29・男)
- ・子どもたちがとても幸せそうで、そうしたようすを見るのは非常に嬉しいことだ。(30・女性)
- ・子どもたちは読んでもらうのは好きだが、自分で読もうとしていないように思う(男)

アンケート回答者全員が、図書館開設後、子どもの知識、態度、技能の面で肯定的な変化をあげている。強制ではなく、自分で楽しみながら読書をすることは、読む、聞く、話すという能力がより刺激され、図書館で聞いたり読んだりした本の内容を、家庭で児童が語れるようになっているのであろう。また、図書館が地域の公共の場であることから、図書館員は図書館活動のほかに館内での児童の生活指導にもあたっており、一定の約束を守る態度が家庭における態度の向上にもつながっているとみられる。

2-11 図書館にたいする要望

<図書館員にたいして>

- ・子どもたちにとって、図書館員はいいお手本であってほしい(28・男)
- ・図書館員は、もっと子どもたちや若者たちを図書館によぶ努力をしてほしい(38・女)
- ・図書館員は子どもたちが多くの知識を得られるよう、よりよいサービスを今後も続けてほしい(42・男)
- ・図書館員は、もっと本そのものについて学んでほしい(38・男性)
- ・図書館がもっと子どもたちに本の利用の仕方や読み方について指導をしてほしい(28・女性)
- ・子どもたちの成長にとって図書館は非常によい場所だ。もっと子どもたちとゲームをしてほしい(49・男性)

<物資面>

- ・紙芝居用の厚紙とお絵かき用の画材類(色鉛筆・絵の具)をもっと提供してほしい。

- ・大人の部屋に世界地図を張って欲しい。

<その他>

- ・図書館の中に来館者むけのアンケートまたはリクエストBOXを設置してほしい。(37・男)
- ・本や雑誌のリクエストをしたときに、それに答えて欲しい(30 男)

図書館員への要望として、内部の活動以外に、図書館の存在を幅広く知らせる広報活動が期待されている。これは図書館活動の効果が認められ、図書館周辺の児童や大人だけではなく、より多くの人に利用をうながしてはどうかという好意的なものである。今後どのような広報活動が可能であるか、図書館委員会も含めて検討の余地がある。SVA にたいしての要望は、本のリクエストが大半であったため、問4の「今後読みたい本」の欄にまとめて表示。また世界地図に関しては、最新版の英語の世界地図を各館の大人の部屋に貼り付けることにした。

3 保育園教員

3-1 アンケート回答者、来館経験のある子どもの数

キャンプの全ての8の保育園から10名の保母から回答を得た。指導している児童の年齢および来館経験のある児童数は以下の通りある。

セクション No.	指導対象 児童年齢	児童数	来館児童	図書館を利用 している児童 の割合
2	4歳 - 2年生	15	10	
3	4 - 5歳	15	8	
6	4 - 5歳	25	23	
6	4 - 5歳	25	20	
7	4歳 - KG . A	29	0	
8	5歳	無記入	無記入	
9	4歳	80	40	
10	5歳	80	30	
11	4 - 5歳	25	10	
11	4 - 5歳	15	10	
合計		309	151	

保育園教員は全員女性である。各保育園の園児数には差があるが、基本的には4、5歳児のどちらも各教員が指導をおこなっている。セクション7の園児を除いては、どの保育園の園児も半数以上は図書館に来館したことがあるが、父母または兄弟同伴のうえでの来館となっている。

3-2 図書館への来館の有無と頻度

来館頻度	人数
月に一度以下	1
月に一度程度	1
二週間に一度	1
一週間に一度	2
一週間に数回	2
無記入	3

教員の全員が図書館へは来館したことはあるが、その後も活発に利用をしている教員は少ない。無記入者も多いため、この原因については現時点では定かにはならない。

3-3 図書館への来館児童数(表1参照)と図書館に行かない児童の主な理由

- ・図書館が遠いため、低年齢の児童は自力では行くことができない。
- ・低年齢のため、文字が読めない。

親への調査同様、園児には自分で図書館に通える年齢に心身ともに達していないと考えられている。

3-4 図書館ができたことによる子どもたちの変化

()カッコ内の数字は記入した教員の学校セクションナンバー

<知識・技能>

- ・図書館で多くの知識を得たことで変化が見られる。より多くのことを理解できるようになってきている(11 A)
- ・たくさんのお話を知ったことで、他の人にお話をする能力がついた。
- ・絵を描いたり、折り紙を折ったり、本を読むことに加えてこのような新しいことを学んで成長がみられる。(7)

<態度>

- ・教員の話に注意深く聞けるようになってきた(9)
- ・教員が説明したことを、以前よりも早く理解し、行動できるようになってきている(10)
- ・子ども同士、または教員との相互関係にもよい影響をあたえている(2)
- ・子どもたちはもっと動物のことや鳴き声のことをしりたがっている。(6)
- ・新しいお話を聞きたがっている。絵を見ることもとても大好きだ(11)

保育園の園児については、図書館や本の影響以上に、この年齢層のもつ自然的な人間成長が第一段階としてあるように思われる。このうえで、絵本や折り紙などの活動が興味関心の幅を与え、より多くのことを知りたがる傾向がでているのであろう。現在はモバイルで低年齢むけの絵本を保育園に貸し出しているが、この段階で絵をながめ、教員に絵本を読んでもらう楽しさを体得した園児が、小学校入学後に図書館に来館する児童として成長していくかどうかは今後も継続した調査を必要とする。

3-5 モバイル(移動図書館活動)について

- ・美しい絵本を見る機会が子どもたちに与えられ、モバイルのある間は学校に来ることも楽しそうだった(7)
- ・子どもたちはとても幸せそうで、話をするのが苦手だった子どもも話す能力が高まってきている(11A)
- ・子ども同士がモバイルの絵本を通してとても仲良くしている。教員に対しても礼儀正しくなっている(9)
- ・モバイルが来ただけでも興奮し、大喜びしていた。(10)(2)
- ・興味深い話ばかりで、子どもたちはこれらの話を聞くのを楽しみにしている(6)(3)

全体的にモバイルの活動は好意的に受け入れられている。事前に教員への読み聞かせの指導や絵本の必要性についてのワークショップをおこなったため、各保育園で有効に活用されている。園児の絵本にたいする反応の大きさや影響を考え、より多くの本をモバイルで巡回させてほしいという声が高い。

3-6 どのような本が子どもたちに必要だと思いますか？

分野	・動物の絵本・短いやさしいお話集・笑い話・子どもたちの心を開発するような絵本 ・おもちゃや工作の本・人形づくりの本
----	--------------------------------------------------------------

教員の大半は、もっとモバイルで保育園に貸し出される本の増加を希望しているが、この他には園児ととものできる容易な遊びや工作の指導書を希望しており、子ども対象の本というよりも、教員むけの指導書関係を希望している。しかし、現時点ではカレン語で書かれた児童の指導書の入手は困難である。SVA が今後も遊びや工作のワークショップをおこなうことは可能ではあるが、教員が週末などの時間をつかって図書館を来館し、文化活動を見学したり、保育園には貸し出していないモバイルの絵本を読み、園児にすばなしをおこなうなど、自主的に教員が図書館活動を仕事に取り入れることは可能であろう。

3-7 図書館にたいする要望

<図書と資材>

- ・もっと子ども向けと大人向けのカレン語の本を希望。
- ・モバイル用の本をもっとふやしてほしい。
- ・図書館に子どもたちが遊べるような人形をおいたらいいと思う。

<ワークショップ>

- ・子どもむけの優しいゲームや歌のワークショップを希望。
- ・図書館員が学校に来て、子どもたちに絵本を読んだり手遊びや歌をやってほしい。

すでに保育園の教員にたいしては「折り紙と工作」のワークショップをおこなったが、そのときから「歌」のワークショップを希望する声はあがっていた。図書館員もいくつかカレンの歌や手あそびを知っているが、逆に保育園の教員のなかにも図書館員が知らない歌や手遊びを知っている人はいるであろう。できれば両

者が集い、双方が教えあうことによって児童に伝えられる数を増やすことが願わしい。また、SVA は歌の歌詞をまとめて冊子にするという協力は可能であろう。ゲームについては、本を出版する予定で準備をすすめている。

4. 小学校教員

アンケート記入教員の人数 23名

4-1 指導している児童の年齢および来館経験のある児童数

セクション	指導年齢	児童数	来館児童
1	2年	23	10
1	2年	33	18
1	1年	80	67
1	2年	51	26
1	1-2年	53	45
3	B - A	62	54
4	5歳-2年	154	75
4	5歳-2年	154	75
5	B - A	45	26
5	1年-2年	20	15
6	B	44	40
6	-	95	85
7	5歳-A	59	0
7	1年-2年	67	0
7	B	75	
8	4歳-2年	21	1
9	B - A	26	0
9	4歳-2年	26	12
9	B - 2年	37	14
9	B - 2年	48	19
11B	A - 2年	290	200
11B	4歳-B	25	
12	4歳-2年	50	

4-2 図書館への来館の有無と頻度

来館頻度	人数
1度もない	2
月に1度以下	7
月に1度程度	5
2週間に1度	1
1週間に1度	2
1週間に数回	1
不明	5

現時点では、図書館を積極的に活用している教員は非常に少ない。教育にかかわる立場から、小学校教員にはもっと積極的に図書館を利用し、学校教育に活かせる面を見出してほしいものである。すでに教

員にたいしては「読み聞かせのワークショップ」をおこなっているが、小学生は自分で読める子どもも多いため、日常的に読み聞かせは保育園の教員ほどおこなわれてはいない。しかし、図書館員がどのように児童に大きな声で本を読んでいるか、またそのときの児童の集中力などを見学するだけでも、教育現場に活かせる点は多いだろう。

4-3 図書館への来館児童数(表1参照)と図書館に行かない児童の主な理由

- ・図書館が遠い。
- ・健康状態がすぐれない子ども(弱視など)もいるため。
- ・途中で川を越えなければならず、小さい子どもたちは自力では行けない。
- ・両親から幼い弟妹の面倒を見るように言われていて、その世話があるため。
- ・ほとんどの子どもは行っているため、行かない子どもの気持ちはわからない。
- ・まだ行っていない子どもは怠けている。

保育園以下の児童は「遠い」「まだ文字が読めない」ということが、図書館へ来ない二大理由であったのにたいし、小学生になるとこの理由のほかに、家の手伝いと幼い弟妹の世話が加わってくることがわかる。実際に、図書館には低学年の児童が乳幼児を背負って来る姿が日常的にみられるが、こうした児童は比較的図書館に近いところに住んでいる。図書館から遠いところに住む児童は、乳幼児を背負ってまで来ることは非常に困難である。

しかし、このため各学校へモバイル活動を開始しており、図書館にある本を目にする機会がキャンプ内の児童に行き渡るよう考慮はされている。

4-4 図書館ができたことによる子どもたちの変化

<知識・技能>

- ・多くの新しい知識を得た。
- ・聞く力と読書力がついた。
- ・理解力と向学心がついた。
- ・多くのお話を知り、会話力がついた。
- ・絵を書く能力と折り紙を折れるようになった。

<態度>

- ・あいさつがきちんとできるようになった。
- ・落ち着いた行動ができるようになった。
- ・つつましいふるまいができるようになってきた。
- ・悪いくせが改善された。
- ・注意深い行動ができるようになり、身ざれいになってきた。

開館からの半年間で、各教員は児童の変化が歴然とあると指摘している。特に図書館にあるさまざまな本から知識を得たと考えられており、読解力の向上もあげられている。これまで児童は図書館においてあるような絵本を見たことがなく、興味のある話は何度も繰り返し読み、図書館にも積極的にリクエストをしている。

また、態度としては基本的なあいさつのほかに、非常に身なりがきれいになったという点を指摘する声

いくつもあがっていたが、これは図書館活動の影響であるかどうかは明確にはわからない。むしろ、これまで屋外で遊んでいた児童が屋内で本を読むようになり、服が汚れなくなったからではないかと思われる。

4-5 モバイル(移動図書館活動)について

- ・子どもたちはどの本も大変気に入り、新しい知識をたくさん本から得ている(11B)
- ・子どもたちはとても興奮し、読むことそのものを楽しんでいる(11B)
- ・モバイルは非常にいいアイデアだと思う。子どもたちにとって読むことの練習を得る機会となった(4)
- ・子どもたちは自分で読んだ後で、他の人にその内容を語るため、話す能力の向上につながる(4)
- ・子どもたちは休み時間も教室で絵本を読んでおり、とても幸福そうだ(1)
- ・教室で子どもたち同士が穏やかになり、平和な雰囲気となった(1)
- ・教員にも子どもにも大変効果的だ。モバイルで子どもたちが絵本のことを知ってから、以前とは確実に違うことを感じる
- ・図書館が近いため子どもたちは行っている。このためモバイルはやらしてもらったことはない。(6)(11B)
- ・まだ実施がまわってこない(1)(9)(5)

教員はモバイルの児童にたいする効果を高くあげており、教員にとっても非常に刺激のある教材であると解している。現時点では、すべての学校に巡回が行き渡っていないために、モバイルを経験していない学校もあるが、教室内で良い雰囲気づくりにも一役かっているようだ。モバイルをはじめたことで、図書館の存在をあらためて知り、来館してくる児童もあり、図書館の良い宣伝にもつながっている。

4-6 どのような本が子どもたちに必要だと思いますか？

カレン語	子どもむけの辞書・やさしいお話
ビルマ語	子どもむけの辞書・やさしいお話
英語	やさしい英語の絵本・英会話の本・
その他	自然環境についての本・異文化についての本・平和についての本・体のしみくの本・歌の本・物語・知識絵本・道徳の本・低学年向けの絵本・教育の本・ゲームの本・算数の指導書
テーマ	内容と絵がともに質が高く、戦いや殺し合いの内容ではなく相互理解と平和について子どもたちに伝えられるものが適している。

基本的には今後もSVAが選書をしたような本を継続して図書館に置いて欲しいという要望が高い。また、それに加え、上の表のようなリクエストがある。児童を指導する際に必要とされる理数系の本や辞書類であるが、学校教育への支援については他のNGO(ZOA)がおこなっており、どのような指導書を配布し、また今後配布予定があるのか把握する必要がある。現時点ではSVAが各学校に教員向けの資料を配布することは難しく、可能性としては図書館にそのような種類の本を配置し、各教員が自主的に図書館で閲覧するというのがあげられるが、資料の使用言語の問題と予算の問題もあり、検討を要する。ニーズに応えるだけの量の本、特にカレン語の本をSVAが供与することは困難なので、謄写版を活用して、子どもおよび大人が自ら本を作れるようにすることを支援すべきであろう。

4-7 図書館にたいする要望

< 図書と資材面 >

- ・教員向けにも本が欲しい。例えば歴史や物語の本(4)
- ・子どもたちに新しい知識を増やすことができるよう、より多くの本を希望(11B)
- ・英語 カレン語の優しい辞書とカレン語の発音テープが欲しい。(1)
- ・さまざまな分野の本を増やして欲しい(1)
- ・今図書館にあるような質の高い本をどんどん増やして欲しい(3)
- ・色鉛筆や絵の具もほしい(11b)

< モバイルについて >

- ・本だけではなく、定期的に図書館員や SVA のスタッフにすばなしゃゲームなど図書館活動でおこなっているようなことも学校でやってほしい(9)
- ・図書館が遠くて行くことができないため、モバイルを月に2度くらい借りられるようにしてほしい(9)
- ・新しい本を加えて、モバイルを続けて欲しい。とにかく子どもたちには大人気だった(7)
- ・まだモバイルを経験していないので、ぜひ我が校にも！(7)

< その他 >

- ・今回の質問用紙の記入の仕方がよくわからなかった(8)
- ・何もいうことなし。すべて素晴らしい。親たちや教員も図書館に行ったらいいと思う。子どもたちは図書館ができて、とにかく多くの知識を得た(1)

モバイル用の本の増冊に加え、SVA スタッフや図書館員の定期的訪問にたいする要望があがっているが、スタッフが定期的に各校を訪問して活動をおこなうことは困難である。スタッフの人材不足に加え、読み聞かせのワークショップをおこなった時点で、ある程度教員に自主的活動をまかせている。しかし、図書館が定期的に紙芝居の読み聞かせなどをおこなうために訪問することは可能であると思われる。

5 図書館員

5-1 この半年間図書館員の仕事をふりかえって

- ・子どもに関する知識を多く得ることができ、今までにない新しい経験となっている。とくに絵本を読んであげているときの喜びは大きい。
- ・図書館員としての仕事の内容や文化活動を覚えることができ、子どもたちに多くの絵本を読んであげられるようになったことは大変嬉しい。
- ・絵本を読んだり、お話をしたり、折り紙をしたり、これまでこのようなことを学んだことは一度もなかった。図書館員の仕事は、子どもたちに多くことを伝えられる仕事だと思う。大人にとっても無料で本の貸し出しが始まり、多くの本を借りられるのはとてもいいことだ。
- ・お金がもらえると思っはじめてみた図書館員の仕事だったが、はじめてみれば多くのことを学び、多くの人々にすばらしい影響を与えている。特に子どもたちと一緒に、絵を書いたりしながら紙芝居づくりをすることはとても楽しい。子どもたちが日に日に絵を書く能力が高まっていることが手にとるようにわかる。
- ・多くの子どもたちの成長の手助けをすることができ、この仕事につけたことを喜ばしく思っている。
- ・子どもたちと一緒にいるときに、その喜びも楽しみもともに分かち合いたい。もっともっと子どもたちと一緒にゲームや読み聞かせや折り紙を教えてあげたい。

5-2 図書館活動は子どもたちにどのような影響を与えていると思いますか？

- ・これまで子どもたちは、時間があっても行く場はなかった。今は図書館ができたことで、多くのことを学ぶことができていると思う。
- ・美しい絵を見て、読んだり書いたりする力がついた。
- ・子どもたちはこれまでこのようなことを経験したことはなく、図書館ができたことで大きな喜びと幸福感を感じている。図書館はキャンプの人たちに多大な効果を与えていると思う。子どもたち自身も、「もし図書館がなかったら誰も本も読んでくれないし、絵を書いたりもできなかつただろうね。大雨が降ったりしなければ毎日くるのに！」と話している。
- ・友だち同士のよい人間関係づくりができるようになったと思う。
- ・今は図書館で自分で本を読み、読書力も高まっている。図書館は、子どもたちにとって憩いの場所になっているようだ。

5-3 図書館にくる子どもたちに、どのようなことを望みますか？

- ・もっと子どもたちが、何か活動をおこなう前に注意深く説明を聞いてくれるようになってほしい。
- ・それぞれのお話にこめられたメッセージを捉え、素直な子どもたちに育てて欲しい。
- ・想像力をいかし、絵を書く力がつくことを望む。
- ・子どもたちが一生懸命学び、先生や目上の人たちにたいする接し方をきちんと身に付けてほしい。

5-4 図書館が建ち、地域の人たちはどのようにとらえていると思いますか？

- ・教育の向上と楽しみを得られる場として非常に良い。特に子どもたちは、これまでこのような絵本を家庭でも学校でも見たことはなく、とても貴重だと考えられている。
- ・キャンプの人たちは、子どもたちが絵本を読む以外に絵を書いたり、折り紙までできるようになったこと喜んでおり、家庭教育にも学校教育にもいい影響を与えていると思われる。
- ・キャンプの大人たちは図書館ができたことをとても歓迎している。特に子どもたちや若者にとって、これまで時間があっても行き場所がなかったからだ。
- ・キャンプの人たちは、図書館は子どもたちにとって新しい知識を得る大きな道のように思っている。教育面、想像力、そして理解力、自己啓発の場としても有益な場所だとみなされている。

5-5 図書館活動で困っていることはありますか？

- ・歌やゲームはやりやすいが、お絵かきの指導や紙芝居制作など子どもを指導するんが難しいものがある。
- ・もっと大人が返却期日を守って欲しい。戻してくれない大人に注意するのは苦手。また、本の表紙が柔らかいものは破損しやすく、扱いがとても難しい。
- ・図書館内をきれいに飾ることは楽しい。ただ難しいのは、自分でも描けない絵の指導を子どもたちにするここと、本が紛失したときに探す努力をすること。
- ・大勢の子どもたちがきているときに、すべての子どもたちに目をくばることはまだまだ難しい。

5-6 モバイルの効果と何か問題点はありますか？

- ・図書館から遠い子どもたちにも絵本を読む機会が与えられ、図書館そのものの存在を知ってもらえた。
- ・図書館に来ることのできない子どもたちにとって、このような絵本を見ることのできる機会が得られて大変よい。
- ・読み聞かせだけでなく、絵や折り紙など、他の文化活動も学校でおこなって欲しいと考えられている。
- ・子どもたちには非常に喜ばれており、もっと新しい本が増えることが望まれている。

5-7 今後どのようなワークショップを希望しますか？

- ・お話の作り方(創作)について、もっと子どもとできるゲームの研修をして欲しい。
- ・絵本作りのワークショップを希望します。
- ・布の絵本の作り方や絵の書き方のワークショップをして欲しい。
- ・ねんどを使った工作のワークショップ。
- ・子どもたちの指導の仕方についてのワークショップ。
- ・図書館により多くの人がかかるような宣伝方法について。

． 考察

全般的には、各館ともに図書館の活動が地域に根づきだし、児童と大人ともにキャンプに必要な施設として受け入れられている。これは、開館後の児童の知識・技能・態度の目に見える向上が、両親と教員から共にあげられている点や、児童自身の来館頻度の高さ、また大人の貸し出し登録者の増加傾向からもいえる。これまで乳幼児から大人にいたる広い年齢層が自由に集まることのできる公共の屋内施設はなく、今後地域の情報交流、文化工芸の伝承の場としても広く開放され、活用がのぞまれる。

各図書館員はこの半年間で基本的な図書館活動の技能は身に付け、順調に図書館を運営することができるようになってきている。活動開始当初は声が非常に小さく、SVAのスタッフに頼りがちであった図書館員も、現時点では児童への接し方にも慣れ、各館が工夫をこらした活動(す話コンテストや折り紙コンテストの開催、児童との紙芝居共同制作など)をおこなえるようになりつつある。

本の管理についても手堅くおこなっており、非常に紛失も少ない。モバイルの貸し出しで本の汚れは多少生じるものの、大きな問題はおきていない。大人への貸出し作業にも慣れ、順調に利用者数は増えている。建物の管理に関しても、破損や盗難がおけるとSVAと図書館委員会に報告をしており、早めに対処をするようにしている。悪天候時には児童を帰宅させたり、あらかじめ図書館を閉館したりするなど、図書館員の判断でおこなわれている。

何よりも、図書館活動が児童や大人にたいして非常に有益な活動であることを確信しながら日々の活動に取り組んでおり、図書館員としての自覚をもって運営できるようになったことは評価に値するであろう。

提言

活動が半年を過ぎ、図書館活動への理解と基本的な活動はおこなえるようになってきているが、来館する大人や教員からさまざまな要望がでていることが今回の調査で判明し、今後も継続して活動をおこなっていくうえで、以下の点の改善または工夫が必要である。

ワークショップで習ったことを確実に実行し、また独自に工夫をして活動をひろげる。

定期的に行事やイベント、コンテストなどをおこない、日常活動にメリハリをつける。

地域の大人や青年層を活動に巻き込む。(例. す話のできるお年よりを招く、民話収集への協力をあおぐ等) 現時点では、中高生の来館者は少なく、この年齢層にみあった活動の企画を試みる必要があるであろう。

図書館の広報活動をおこなう。まだまだ各図書館が管轄するセクション人口の割合にたいしての来館者は高いとは言えず、今後常連の来館者に加え、新規の来館者を増やすためにも必要とされる活動であ

ろう。(例. 掲示板の積極的な活用、高校やスペシャルスクールへの貸出し制度の宣伝など)

字が読めないことを理由として図書館へ来ない大人と児童への来館勧誘対策。

図書館員が2ヶ月に1度など小学校や保育園を訪問し、紙芝居やペープサートなどを図書館に来ることのできない児童に披露する。

SVA側は、今後も蔵書の支援に加え、図書館員へのワークショップは今年度も継続しておこなう必要性はある。内容は今回の調査で図書館員から要望のあがっている内容に加え、これまで指導をしたワークショップでさらに質を高めた活動などである。

図書館間の交流の必要性。各館が独自に活動をくりひろげるようになり、お互いに工夫している点や日常にかかえている問題を図書館員同士が話合う機会を設ける。これまではワークショップ時に問題点などを話し合ってきたが、今後事務所移転に伴いワークショップの回数が減ることをかんがみ、2ヶ月に1度など定期的な会を設ける。

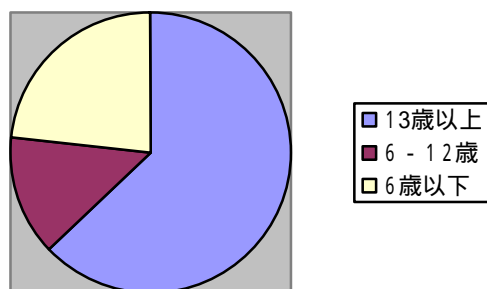
謄写版使用法のワークショップを実施し、大人および子どもが自分たちで本を製作、配布できるようになることを支援する。小説やエッセイのコンテストを実施し、図書館員が、カレン語をチェックした後に優秀作品を印刷することも考えられる。特に、カレン語の大人向け、ヤングアダルト向けの本が圧倒的に不足しており、今後もSVAも児童向けの本の翻訳しかできないことを考えると、この活動のニーズは高い。

添付資料:

対象地域の概要

表1. メコンカ・キャンプ人口

世帯数	13歳以上		6 - 12歳		6歳以下		計
	男	女	男	女	男	女	
2,375	4,777	4,435	1,073	964	1,743	1,677	14,669
合計	9,211		2,037		3,420		



2001年7月現在 出所: Mae Kong Kha Camp Committee

表2. 各図書館の管轄セクションごとの人口比³

単位:人

図書館名	図書館の位置するセクション	管轄セクション	セクション人口	計
第1図書館	2	1	1,395	3,004
		2	556	
		3	486	
		4	567	
第2図書館	6	5	622	5,761
		6	1,720	
		7	1,634	
		8	1,218	
第3図書館	11	9	615	4,261
		10	1,099	
		11	2,026	
		12	521	

2001年7月現在 出所: Mae Kong Kha Camp Committee

表3. 回答者の人数と男女比

単位:人

	男性	女性	計	総計
第1図書館	16	9	25	80
第2図書館	13	15	28	
第3図書館	13	14	27	

³ メコンカ・キャンプには全部で13のセクションがある。本表に掲載されていないセクション13は、ビルマ人の元学生のグループのメンバーおよびその家族が居住し、自主的にセクションの運営を行っている。このセクションは、もともと、国境沿いにあった彼らのキャンプが、タイ政府のキャンプ統合政策によって、1997年に移設された。セクション13には学校図書館があり、SVAは、図書館活動についての教員研修、ビルマ語の児童図書の手配を行っている。

表 4 保育園児童のセクション毎の図書館利用率

セクション	児童年齢	児童数	来館児童	図書館利用率
2	4歳 - 2年生	15	10	67%
3	4 - 5歳	15	8	53%
6	4 - 5歳	25	23	92%
6	4 - 5歳	25	20	80%
7	4歳 - KG . A	29	0	0%
8	5歳	無記入	無記入	
9	4歳	80	40	50%
10	5歳	80	30	38%
11	4 - 5歳	25	10	40%
11	4 - 5歳	15	10	67%
合計		309	151	49%

表 5 小学校児童のセクション毎の図書館利用率

セクション	学年	児童数	来館児童	図書館利用率
1	2年	23	10	43%
1	2年	33	18	55%
1	1年	80	67	84%
1	2年	51	26	51%
1	1-2年	53	45	85%
3	B - A	62	54	87%
4	5歳-2年	154	75	49%
5	B - A	45	26	58%
5	1年-2年	20	15	75%
6	B	44	40	91%
6	NA	95	85	89%
7	5歳-A	59	0	0%
7	1年-2年	67	0	0%
7	B	75	NA	-
8	4歳-2年	21	1	5%
9	B - A	26	0	0%
9	4歳-2年	26	12	46%
9	B - 2年	37	14	38%
9	B - 2年	48	19	40%
11B	A - 2年	290	200	69%
11B	4歳-B	25	NA	-
12	4歳-2年	50	NA	-
合計		1384	707	51%

表6 . 利用者の年齢層

単位:人

館名	3-5歳	KG-1 st	2 nd -4 th	5 th -7 th (13-15歳)	8 th -10 th (16-18歳)	計
第1図書館	8	26	11	0	0	45 (50%男子)
第2図書館	6	61	0	0	0	67 (80%男子)
第3図書館	2	41	26	6	0	75 (50%男子)
合計 (%)	8.6	68.5	19.7	3.2	0	187

* 子どもが図書館に行かない理由

- ・家が図書館からとても遠いため
- ・まだ乳幼児なので、字を読めないから
- ・うちの子どもたちは本を読むのが好きではなく、なまけがちなので。

(2) メラマルアン・キャンプ図書館活動中間評価報告書

2002年4月

報告者:SVAメーソット事務所

図書館活動専門家 渡辺 有理子

評価方法

- **背景** 2001年6月に開館したメコンカ・キャンプ図書館(三館)は、活動を開始して半年が過ぎ図書館員にたいする基本的な図書館活動に必要な技能指導も完了したため、現時点で図書館員および来館者を含めた活動状況を把握することとした。
- **評価目的**
 - * キャンプにおける図書館活動の影響を明確にする。
 - * 図書館活動の利用状況を把握し、改善点を確認する。
- **事業目標**
 - 上位目標:子どもと成人の知識、技能、価値が発達、改善される。
 - プロジェクト目標:図書館活動が改善される。
- **調査対象** メラマルアン・キャンプ図書館(第一、第二、第三図書館)
 - * 児童:図書館を利用している3歳~18歳。30名から50名。
 - * 大人の利用者:各館から25名~30名。
 - * 教員:キャンプ内のすべての保育園、小学校から各校2名。
 - * 図書館員:各館2名。計6名。
- **調査方法**
 - * 児童:アンケート調査および各図書館に来館する児童30名以上を対象に、年齢ごとに色分けしたグループに分け、色紙の紙片を質問ごとに回答用紙の上に置く。
 - * 大人の利用者:アンケート調査
 - * 保育園・小学校教員:アンケート調査
 - * 図書館員:アンケート調査、関係資料の収集
- **調査メンバー**
 - * SVAメーソット事務所長:中原 亜紀
 - * SVA図書館活動専門家:渡辺 有理子
 - * アシスタントコーディネーター:Mulabi Rawiroong
 - * アシスタントコーディネーター:Primrapaporn Thongdee
 - * アシスタントコーディネーター:Worachart Klanarongchao
- **実施日時**
 - 第一図書館 :2002年2月8日(金)PM15:30~17:00
 - 第二・三図書館:2002年2月9日(土) PM15:00~16:00

・来館する児童の大半は学校に通学しているため、調査は放課後である平日の

15 時以降および学校の休日である土曜日に実施した。

● 対象地域概要

メラマルアン・キャンプ人口

世帯数	13 歳以上		9 - 12 歳		9 歳以下		計
	男	女	男	女	男	女	
1,654	3,346	2,920	1,265	1,228	600	550	9,909

2002年1月現在

各図書館の管轄セクションごとの人口比 (除:未登録者)

単位:人

図書館名	管轄セクション	セクション人口	計
第1図書館	1	623	2,685
	2	844	
	3	429	
	4	789	
第2図書館	5A	1,530	4,159
	5B	1,116	
	6	1,513	
第3図書館	7A	1,415	2,324
	7B	909	

2002年1月現在

調査結果

1. 児童の利用者

1-1. 利用者の年齢層と居住セクション

表1. 中間評価調査時の対象児童年齢と人数

単位:人

館名	4-5 歳	KG-1 st (6-8 歳)	2 nd -4 th (9-11 歳)	5 th -7 th (12-14 歳)	8 th -10 th (15-17 歳)	女子	男子	計	総計
第1図書館	5	47	20	2	0	42	32	74	169
第2図書館	11	28	18	2	0	25	34	59	
第3図書館	5	17	12	1	1	22	14	36	

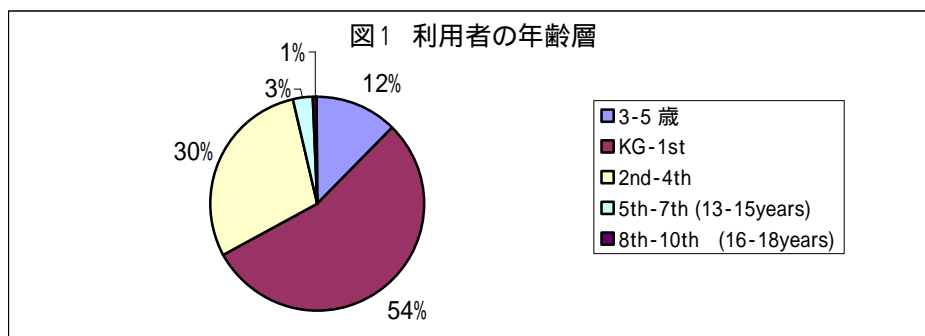
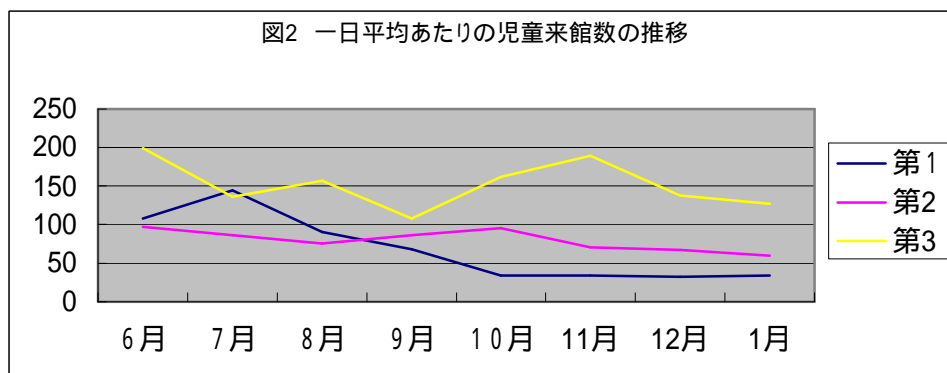


図1は、調査当日の児童の来館年齢をあらわしている。各館に共通してKGレベル(6歳以上)から第1学

年(8歳)の児童が全体の5割強を占め、第2学年から第4学年を含むと、利用者の8割は小学生で占められる。これは、図書館の児童室に配架している児童書を小学生を対象に選書をしていることを考えると、絵本の対象年齢と見合った児童が図書館を利用しているといえる。図書館を利用している児童は、学校のお昼休み時間または放課後に来館しており、そのどちらの休み時間にも利用(一日に二度)している児童は全体の8割にのぼる。来館頻度は、週に3、4日がもっとも多く、一度来館をした児童は継続して図書館を利用しているようすがうかがえる。

しかし、児童の居住区を見ると、それぞれ図書館のあるセクションと同じ場所に住む児童が来館者の大半を占め、第1図書館で66%、第2図書館で93%、第3図書館で84%にのぼり、日常的に図書館を利用しているのは図書館周辺に住む児童が主となっている。こうしたことを考慮し、図書館から遠いセクションに住む児童のためにキャンプ内の保育園と小学校を対象に移動図書館活動をおこなっているが、こうした児童は図書館にある絵本を読むことはできても、図書館でおこなわれるさまざまな文化活動には参加することができていないというのが現状である。

1-2. 来館児童の推移



上の表は各館の開館からの一日平均あたりの児童来館数の推移をあらわしている。開館時点に比べ、各館ともに減少傾向にあり、メコンカキャンプが開館6ヵ月後の調査で平均100名前後の利用者数に落ち着いているのに対し、第1、第2図書館では50名前後の利用となっている。こうした減少傾向について、図書館員へのインタビューによると、1. キャンプ内での行事の多さ(スポーツ大会、クリスマスのイベント準備)、2. キャンプ内での狂犬病の発生により、親や教員が放課後の外出を児童に控えさせた。3. 雨期のときのほうが、子どもたちは外で遊ぶことができないために、図書館に来ていた。という3点をあげている。

各図書館員自身は積極的にアイデアをだして読み聞かせや文化活動をおこなっており、ワークショップで習ったことをさらに工夫して活動を広げたり、新作の製作、また相互に図書館員が交流をしながら活動をしており、活動自体はむしろ開館時よりも独自に広げることができている。こうした点からも、図書館員の対応が減少の一因とは思われない。むしろ児童によると、児童書の新作がなかなか図書館に入らないことによる図書館離れの声が聞かれ、図書館員があげた3点に加え、この点も減少傾向の要因の一つとなっているのではないかとと思われる。

1-3. 児童の読書傾向

小学校低学年の児童は、図書館員から絵本を読んでもらうことは非常に好んでいるが、まだまだ自分からすすんで読むまでにはいたっていない。KGレベルから第1学年の児童のうち63%が図書館にある絵本57タイトルのうち、この半年間に自分で読んだ絵本は10冊以内と答え、全部の本を読んだという児童は4%にとどまっている。この学年が図書館利用の54%を占めていることを考えると、現在図書館に来ていた児童の約半数は、自

分で読むよりも、図書館員の読み聞かせを聞きにきているとみられる。

しかし、第2学年から第4学年になると、図書館にある絵本全部を自分で読んだ割合が34%と急増し、低学年の児童に比べて自分で文字を読み、絵本を楽しむことができるようになってきている。これは、学年があがるにつれて、絵本の文章を読める学力がともない、理解力も向上することによるであろう。

また、図書館に配布している絵本57タイトルのうち、児童にもっとも好きな作品のアンケートをとったところ、上位5作のうち、『あかずきん』『スーホの白い馬』『ひとまねこざる』の3作は、メコンカ・キャンプと同じ作品が選出された。共通しているのは、動植物を愛し、家族愛のある話を好み、主人公が智恵をしばって困難を乗り越える展開や勇敢な行動で集団をひっぱる力をもった主人公の話が支持されている。児童の大半は、これまでこうした色彩が豊かで、絵の表現に動きのある作品を目にした経験がなく、「絵がとてもきれいだから好き」という理由は、すべての絵本に共通している。

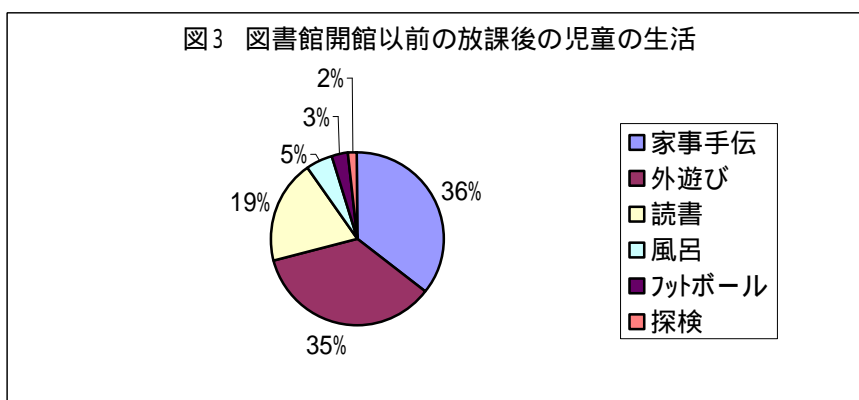
1-4. 図書館でおこなわれる文化活動

表2. 年齢別図書館の文化活動への関心順位

学年	ベスト3	活動名	学年	ベスト3	活動名
3-5歳	第1位	布の絵本	2 nd -4 th	第1位	布の絵本
	第2位	紙芝居		第2位	磁石の魚釣り
	第3位	ペーパースーツ		第3位	紙芝居
KG-1 st	第1位	布の絵本	5 th -7 th	第1位	お絵かき
	第2位	ペーパースーツ		第2位	布の絵本
	第3位	紙芝居		第3位	-

図書館では、絵本の読み聞かせのほかに週にさまざまな文化活動(絵本の読み聞かせ すばなし ペーパースーツ 紙芝居 布の絵本 磁石での魚釣り ゲーム 手遊びと歌 工作 おりがみ お絵かき 他の活動)をおこなっている。児童の文化活動への嗜好は年齢と個々の興味によって異なっているが、各館に共通しているのは、低学年から中学年には素材そのものに動きのある活動(布の絵本、ペーパースーツ、紙芝居など)を好む傾向がみられ、高学年になるにつれて絵画への関心が高まっており、集団的な遊びや共同作業から、個人的表現へと興味関心が移行しているのがわかる。こうした点は、メコンカ・キャンプでも共通してみられた傾向であった。

1-5. 図書館建築以前の児童の生活と将来の希望



図書館がキャンプにできる以前の生活を第2学年以上(9歳以上)の児童にアンケートをしたところ、女子児童の8割は放課後は自宅で両親の家事手伝いをしており、男子児童は外遊びが主であった。家事手伝いの内容は、水汲み、木材の運搬、料理、洗濯、幼い妹弟の世話などがあげられる。児童の来館平均が週に3,4回とい

う結果とあわせると、今では一週間のうち図書館にくる日と、両親の手伝いをおこなう日とがあるようである。

将来の夢は、児童が日頃キャンプのなかで接する機会のある職業に限られ、教員、医者、看護婦が8割を占める。これに続いて、少数で兵士、牧師、図書館員、技師、村長などがあがっている。各職業に共通してみられる理由は、それぞれの職業が民族や国のために役立ち、多くの人を助けたり、知識を与えられるから、と答えており、自分のためになる仕事というよりも、人のためになる仕事につきたい、という意識が強うかがわれる。

1 - 6. 児童の図書館への感想 (図書館員から小学生へのインタビュー)

- ・図書館にある本はどれも絵がきれいで、素晴らしいし、多くのことを学ぶことができる。
- ・図書館ができてとても幸せに思う。もし図書館ができなければ、このような本に出会えもせず、誰もぼくたちに絵本を読んでくれなかっただろう。
- ・絵本のほかに、折り紙をおり、絵も書けるようになった。こうした活動に参加できることは嬉しい。
- ・今までは外で遊ぶことばかりしていた。今は図書館にきて、たくさんの本を読む。

2. 大人の利用者 (利用登録が可能となる中学生以上が対象)

アンケート記入者の人数と男女比

単位:人

	男性	女性	計	総計
第1図書館	8	20	28	87
第2図書館	9	10	29	
第3図書館	8	22	30	

2 - 1. 貸出し登録者数と男女比

表3. 各館における登録者の男女比

単位:人

	男女登録者数	登録者計
第1図書館 (セクション4)	女性 264	424
	男性 160	
第2図書館 (セクション5A)	女性 180	339
	男性 159	
第3図書館 (セクション7A)	女性 92	157
	男性 65	

2002年1月現在

メラマルアンキャンプでは、特異な地形によりセクション6の一部と7Aが河をはさんだ対岸に位置し、他のセクションとはやや隔離された場所に位置する。このため3箇所の図書館は、セクションの人口比に加え、立地条件を考慮した場所に建築されている。図書館で本の貸出しが可能となる、中学生以上の登録者をキャンプの人口と比べてみると、全体で16%の人(100人につき16名)が現在登録をしており、これは各図書館ともに毎月増加傾向にある。

表3からもわかるように、登録者数は各図書館でかなりの格差がみられるが、図書館ごとに管轄する地域の人口と比較すると、第1図書館では23%、第2図書館では13%、第3図書館では11%の人が登録を済ませていることになる。第1図書館は、中学・高校への通学路にあり、学生にとって登録しやすい立地にある点が、この図書館の登録者を増やしている一因でもある。また第3図書館では図書館のある7Aセクションからは現在125人が登録をしたが、対岸の7Bセクションからはわずか19人しか利用登録をしておらず、大人にとっても7Bからの利用は容易ではないことが判明。

登録者の男女比では、キャンプ内の女性20%、男性12%の人が登録を済ませており、女性の登録者が男性を大きく上回っている点がメラマルアンキャンプの登録者の特徴としてあげられる。

2 - 2 . 図書館の利用頻度

大人の利用者は、9割の人が本を借りに来ることを目的に来館しており、来館する間隔は週に一度程度とする人がもっとも多く、今回の調査対象者のうち36%を占めている。また、週に2,3回利用をしている人も22%のほり、一度登録をした人は、定期的に図書館を利用していることがわかる。

2 - 3 . 大人の読書傾向

表4 . MRMキャンプにおける貸出し頻度の高い本ベスト5

	書 名	言語	内 容
1	Home Magazine	K	雑誌(カレンの文化、生活)
2	Dogs-Crooked Tail Turns- Straight	K	実在したカレン人2名の人生
3	Karen tall tales	K	カレンの民話
4	Thu Ta Swe Soon	B	雑誌(教育と能力開発)
5	Three stars and Elephant star	K	カレンの伝説的英雄物語

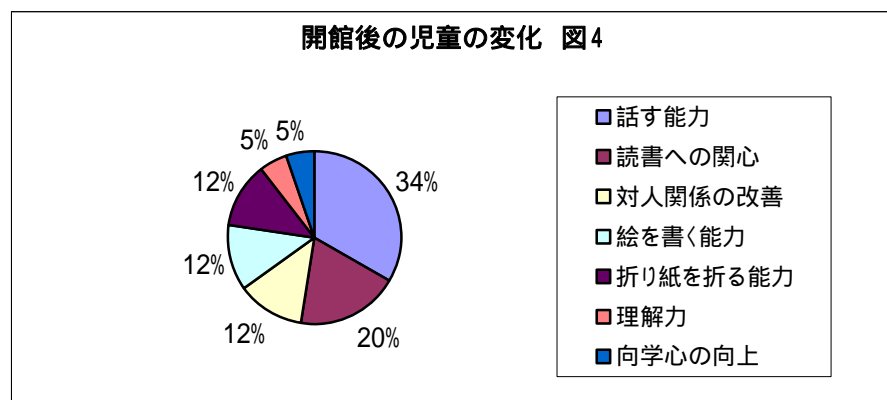
注)K カレン語 B ビルマ語

各図書館ともに、カレン語の雑誌の貸出し頻度が高くて、キャンプのなかで、気軽に読める娯楽的要素をもった雑誌に人気集中している。現在カレン語の雑誌は、各館に2タイトル(季刊)を2冊ずつ配布しており、雑誌の種類増加にたいする要望が非常に高い。しかし、入手可能なカレン語の雑誌はすでに配布している以外に出版されていないため、KIC(カレン・インフォメーションセンター)が毎月発行しているニュースレターを2002年5月号より各館に配布予定。

また、雑誌以外でもカレン語の本の貸出し頻度は高いが、現在カレン語の本の配架が29タイトル、ビルマ語の本が129タイトルとなっており、蔵書数の少ないカレン語の本は常に貸し出されている状況となっている。このため、「いつ図書館に行っても、借りたいカレン語の本が借りられない」という声があがっている。

今後はこうしたカレン語、ビルマ語の本の増加にくわえ、「農学、養鶏、機械工学、地理、歴史、料理、裁縫、薬学、育児、保健衛生、語学」など、小説以外の多岐にわたる分野の本の支援が望まれている。

2 - 4 . 家庭における児童の変化



図書館を利用している児童をもつ家庭において、図書館開館後の児童の変化について尋ねてみたところ、もっとも多い意見は、「話す能力の向上」である。これは、図書館員から聞いたお話を自宅で両親に語る機会が増えたためであり、多い児童では20話をこえる物語を話しているとのことである。これは「話す能力」に加え、記憶

力の向上にも関係していることであり、さらに両親は自分たちにだけでなく、幼い妹弟や友人にもお話を聞かせてあげられるようになったことを、「楽しみを他の人にも分けてあげられるようになってきた。」と、対人関係にも良い変化があらわれているとみている。

一般的に、図書館で紹介される絵本をとおして児童の「読書」にたいする関心が高まり、文字を読むことの楽しさを感じ得た児童は、学校の宿題ですら以前よりも楽しく取り組めるようになってきたとの点も指摘されている。さらに図書館の文化活動をとおして、折り紙やお絵かきの技能が付き、図書館を「楽しく教育を受けることができる場」とみなしており、児童の家庭からは、さらなる読書力の向上とこうした技能の質の向上が望まれている。

3. 保育園・小学校の教員 アンケート記入教員の人数 6 保育園13名 ・ 9 小学校 19 名

3-1. 教員の来館頻度と図書館にたいする意識

アンケートに回答した 32 名の教員のうち、図書館に一度も来館したことのない教員は3名、月に一度程度の来館が13名、月に一度以下という人が7名となっており、これらが全体の7割を占める。こうした点を見ると、教員の図書館利用頻度の低さ

が目立つが、キャンプのなかで数少ない有職者である教員にとっては、なかなか図書館へ行く時間が他の人たちよりも取りにくい状況であるということも否めない。しかし、図書館の意義を感じつつも、「子どもたちには積極的に利用をうながしてはいない」という意見もあり、児童の図書館利用を広げるためには、より一層の図書館と学校(教員)との連携が必要である。

3-2. 園児、児童への変化と影響

表5. 児童への知識、技能、態度面の変化

知 識	新しい知識の獲得	75%
	読書能力の向上	19%
	異文化への理解	6%
技 能	折り紙を折る技術	64%
	お絵かきの能力	36%
態 度	教員や目上の人に対するふるまいの改善	55%
	友人との協調性	25%
	集中して人の話を聞く	15%
	身なりを清潔に保つ	5%

表5は、知識面、技能面、態度面における、図書館開館以前と開館後にみられる教員の目からみた児童の変化にたいする指摘である。図書館にあるさまざまな絵本を目にしたことで、学校では得られなかった新しい刺激や知識を得られたと感じている教員が75%にもものぼる。また、図書館員から読み聞かせを日常的に聞くことで、集中して人の話を聞けるようになったという指摘もあり、こうした態度の変化が学校での就学態度にもあらわれ、結果として教員や目上の人に対するふるまいが改善されたとみられているのではないと思われる。

図書館では、手足の汚れを入り口で洗い落としてから入るように図書館員が指導をしているため、こうした指導も児童の衛生にたいする意識変化につながっているであろう。また、小学校の授業では図画工作の時間がないため、折り紙や絵画の技能は図書館ができれば児童に身に着かなかつた能力として高く評価されており、かつ図書館活動でのこうした共同制作が、学校における友人との協調性の改善にも影響をあたえはじめてい

る。

3 - 3 . モバイル(移動図書館活動)の反響

モバイルでの活動がはじまり、距離的に図書館に来ることのできなかった保育園児と小学生にも絵本を読む機会ができた。

教員の一人は「モバイルで絵本が届いたときの子どもたちの幸せそうな笑顔と、興奮の大きさははかりしれません。」と、教室での子どもたちの様子をこう表現している。教員からは、「ストーリーと絵の質の高い絵本がいかにか子どもたちを惹きつけるのかが理解できた。」との声もあがっており、教員の仕事にも絵本の存在は刺激をあたえることになったようである。

児童は絵本を読んだ後には教員にたくさんの質問をしてくるようになり、絵本のなかの主人公をまねた振る舞いやお手本となる行動をしてみるなど、読後の影響が良いかたちで現れ出している。保育園では保育士が読み聞かせをしているが、園児は絵を見ることへの関心が高まり、まだ文字は読めなくとも絵を眺めながらページを繰るといふ、本への興味から読書の第一歩を踏み出しはじめている。何よりも、これまで図書館の存在を知らなかった児童が学校に届いたモバイルによって図書館のことを知り、自主的に図書館を訪れた児童もあり、図書館そのもののよい宣伝効果にもなったといえる。

4 . 図書館員

4 - 1 . 図書館の仕事について

第1 図書館員

図書館員として、すべての子どもたちのために最善をつくしたいと思っている。子どもたちとともに、図書館活動を一緒にしながら、幸せそうな子どもたちのようすを見ることができると、自分自身もとても幸せを感じる。図書館ができるまで外で遊ぶしかなかった子どもたちが、絵本をとおしてたくさんの知識をえられるようになったと思う。これからも子どもたちのためになることであれば、どんなことでも学びたい。

第2 図書館員

図書館員になって、新しいことをたくさん学び、キャンプ内の多くの人とも新しい関係を築けた。絵が苦手な子どもも、一生懸命描こうと努力をし、最後に素晴らしい絵を仕上げた時の喜びはとても大きい。図書館は非常に有益な場で、多くのお話からは良い手本を得られる。子どもたちは図書館を大変気に入っており、今後も新しく学べるのであればどんなWsでも行って欲しい。

第3 図書館員

図書館員の仕事というのは、とても意義のある仕事で、キャンプの子どもにも大人にも多くの恩恵を与えられる仕事だと思う。絵本の読み聞かせや、ペーパーサートをおこなっているときに、声を変えながら読むと子どもたちは非常に喜び、こうした反応を直接目にするたびに、大きなやりがいを感じる。図書館活動をとおして、子どもたちは楽しく教育をうけられていると思う。自分で大人の本を借りて帰り、おもしろいお話は子どもたちに語ってあげるようにもしています。

4 - 2 . 図書館活動における要望

第1 図書館員

図書館活動で難しいのは、巻き込み式パペットシアターや紙芝居の新作をつくったり、お絵かきの指導をすること。可能であれば、こうしたことを子どもたちに教えるためのWSをしてほしい。また、活動をおこなうときに子ども

たちがもっと私たちの注意に耳をかたむけてくれたらいいと思う。

第2 図書館員

図書館活動では、絵本の読み聞かせは優しいが、紙芝居の制作は難しい。また、本が紛失したときにそれが戻るようにすることは非常に困難だと感じている。また、子どもたちにはもっと自分で読むことを好きになってほしい。

第3 図書館員

ワークショップで自分で絵を描かなければならないときは難しいが、紙工作のようなWSはぜひ今後やってほしいと思っている。子どもたちがもっと図書館の約束を守り、たくさんのことを学ぼうとする姿勢を期待します。

考察

活動が半年を過ぎたメラマルアン・キャンプにおいて、現時点では特に大きな問題は生じていない。これは第一に各図書館員自身がワークショップでの技能を確実に身に付け、さらに工夫やアイデアをこらして自主的な活動を展開していけるまでに成長していること。第二に館内が子どもたちの絵画作品や、一緒に作った飾り付けであふれ、子どもと図書館員との関係が良好に育まれていること。第三に、児童の家庭と学校の教員から、図書館開館後の知識、技能、態度面における歓迎すべき変化があげられ、キャンプにおいて図書館が非常に有意義な場であるとの意識をもたれていること。第四に大人の貸出し登録者の増加傾向。以上四点が順調な図書館活動の背景としてあげられる。

活動半年の期間中、6名の図書館員のうち、辞職1名、産休2名、休職1名と、図書館員に関しては困難な状況も生じたが、その都度図書館委員会が適任のアシスタントをあてがい、活動がとどこおることのないように図書館員を手助けしてくれており、こうした委員会との良好な関係も、図書館活動が支障なく運営されている一因でもあろう。図書館委員会は、図書館が大人にも子どもにも多くの知識や異文化と出会える必要不可欠な場として認識してくれており、地形状まったく図書館を利用することができていない7Aセクションにも子どもむけの図書館を建設してほしいとの要望がでている。実際、今回の調査では、7Aの児童で7Bセクションにある図書館に行ったことのある小学生は皆無であった。

全体的にメラマルアンキャンプでは大人の読書欲が高く、図書館に設置したアンケートBOXには常に多くの声が寄せられている。内容は具体的な本のリクエストに加え、図書館がよりよくなるような提言も含まれ、図書館への関心の高さがうかがえる。今後、図書館ではこうした熱心な地域の人や教員との連携協力で、広報活動や行事を開催して活動の幅を広げることによって、減少傾向であった児童の利用にも変化があらわれるのではないかとと思われる。SVAにたいしては、今後も継続した支援を望む声が非常に高い。

提言

今後、図書館活動の質の向上のために、以下の点の改善または工夫がなされることが望ましい。

定期的に行事やイベント、コンテストなどをおこない、日常活動とのめりはりをつける。

例．絵画コンテスト、素話コンテスト、小説コンテスト等

地域の大人や青年層を活動に巻き込む。

例．素話のできるお年よりを招く、民話収集への協力をあおぐ、民族楽器の演奏をしてもらう等

図書館の広報活動をおこなう。

例．掲示板の積極的な活用、高校やスペシャルスクールへの貸出し制度の宣伝、小学校での教員による宣伝等

図書館員による小学校、保育園への出張公演

例. 紙芝居、ペープサート、パネルシアターなど図書館でおこなっている活動

図書館間の会議や研究発表会の開催

すでに各図書館員は、手本となるような飾り付けや活動をおこなっている図書館を見学に行くなどを自主的に
おこなっているが、こうした機会を定期的に設け、独自の活動を発表や、活動における悩みや問題点につ
いての解決法について討論する機会をつくる。

謄写版使用法のワークショップの実施

大人および子どもが自分たちで本を制作、配布できるようになることを支援する。小説やエッセイのコンテスト
を実施し、図書館員がカレン語をチェックした後に優秀作品を印刷することも考えられる。特に、カレン語の大
人向け、ヤングアダルト向けの本が圧倒的に不足しており、今後もSVAも児童向けの本の翻訳しかできない
ことを考えると、この活動のニーズは高い。

さまざまな分野の本の配布

大人の本に関してはさまざまなリクエストがあがっており、今後は小説に限らずさまざまな分野の本を購入し、
蔵書に加えてゆくようにする。

図書館員の労働規約の作成

休暇や休職・産休などの労働規約を作成し、図書館員が安心して継続した仕事を続けられるような体制を整
える。

(3) ヌボ難民キャンプ図書館活動中間評価報告書

2003年4月

報告者:SVAメーソット事務所

図書館活動専門家 渡辺 有理子

概要と評価方法

- **背景** 2002年5月に開館したヌボ難民キャンプ図書館(2館)は、活動を開始してすでに10ヶ月が過ぎ、図書館員にたいする基本的な図書館活動に必要な技能指導もほぼ完了したため、現時点で図書館員および来館者を含めた活動状況を把握することとした。
- **評価目的**
 - * キャンプにおける図書館活動の影響を明確にする。
 - * 図書館活動の利用状況を把握し、改善点を確認する。
- **事業目標**
 - 上位目標:子どもと成人の知識、技能、価値が発達、改善される。
 - プロジェクト目標:図書館活動が改善される。
- **調査対象** ヌボ難民キャンプ図書館(第一、第二図書館)
 - * 児童:図書館を利用している3歳~18歳。30名から50名。
 - * 大人の利用者:各館から25名~30名。
 - * 教員:キャンプ内のすべての保育園、小学校から各校2名。
 - * 図書館員:各館2名。計4名。
- **調査方法**
 - * 児童:アンケート調査および各図書館に来館する児童30名以上を対象に、年齢ごとに色分けしたグループに分け、色紙の紙片を質問ごとに回答用紙の上に置く。
 - * 大人の利用者:アンケート調査
 - * 保育園・小学校教員:アンケート調査
 - * 図書館員:アンケート調査、関係資料の収集
- **調査メンバー**
 - * SVAメーソット事務所長:中原 亜紀
 - * SVA図書館活動専門家:渡辺 有理子
 - * コーディネーター:Didi Wanakornkonglap
 - * アシスタントコーディネーター:Worachart Klanarongchao
- **実施日時** 2003年3月15日(金)
 - 第一図書館:10:00 - 11:30
 - 第二図書館:13:00 - 15:30
 - * 来館する児童の大半は通学しているため、調査は学校が休みである土曜日に実施。

● 対象地域人口

ヌボ難民キャンプ人口

世帯数	13歳以上		6 - 12歳		5歳以下		計
	男	女	男	女	男	女	
2,696	3,757	3,577	1,593	1,433	833	946	12,139

2003年3月現在

調査結果

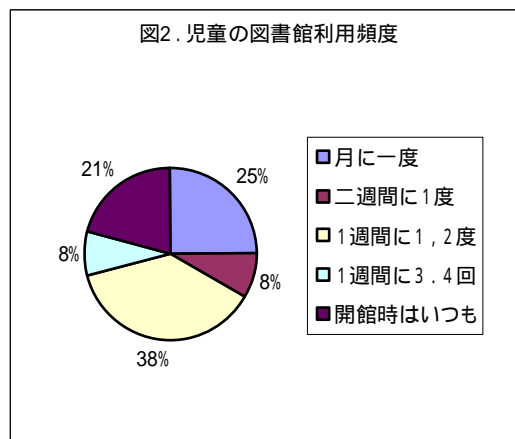
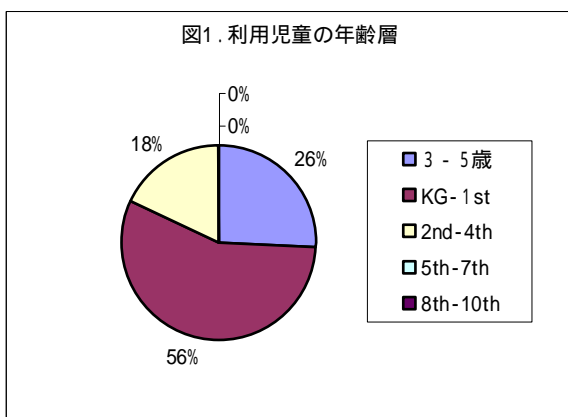
1. 児童の利用者

1-1. 利用者の年齢層と居住セクション

表1. 中間評価調査時の対象児童年齢と人数

単位:人

館名	3-5歳	KG-1st (6-8歳)	2nd-4th (9-11歳)	5th-7th (12-14歳)	8th-10th (15-17歳)	女子	男子	計	総計
第1図書館	15	36	11	0	0	10	52	62	105
第2図書館	12	23	8	0	0	16	27	43	



ヌボ難民キャンプは全体が平地にあり、端から端までを徒歩でまわっても30分程度と小規模な難民キャンプのため、車でなければ図書館間を移動することが難しい他の難民キャンプに比べて、小学生以上であれば図書館へは自分の足で訪問しやすい環境にある。しかしながら、図書館を利用している児童は、図書館のあるセクションと同じ地区の児童がそれぞれ8割強を占め、図書館から離れた場所に居住する児童の利用は激減する。利用年齢は図1のように74%が小学生で占められるが、3-5歳児の利用は他のキャンプよりも高く、恵まれた立地条件が低年齢児の利用により影響を与えていると思われる。

しかしヌボの児童の図書館利用頻度は決して高くはなく、メコンカ、メラマルアンの6館すべてが平均して1週間に3,4度の利用が8割を占めるのにたいし、ヌボでは図2のように「週に3,4度」または「開館日は毎日来る」という児童はわずか3割にとどまっている。こうした相違の要因の一つとしては、開館時間の問題があげられ、他の難民キャンプ図書館が学校の昼休み時間や放課後にも開館しているのにたいし、ヌボの図書館は開館時間帯が学校の休み時間とまったく重なるために、小学生は昼休み、放課後ともに図書館を利用することができず、利用は平日ではなく学校が休みとなる土日に集中している。こうした点が、「週に1,2度」の来館者が全体の34%と

いうもっとも高い割合となった要因とみられる。

1 - 2 . 一日平均あたりの来館児童の推移

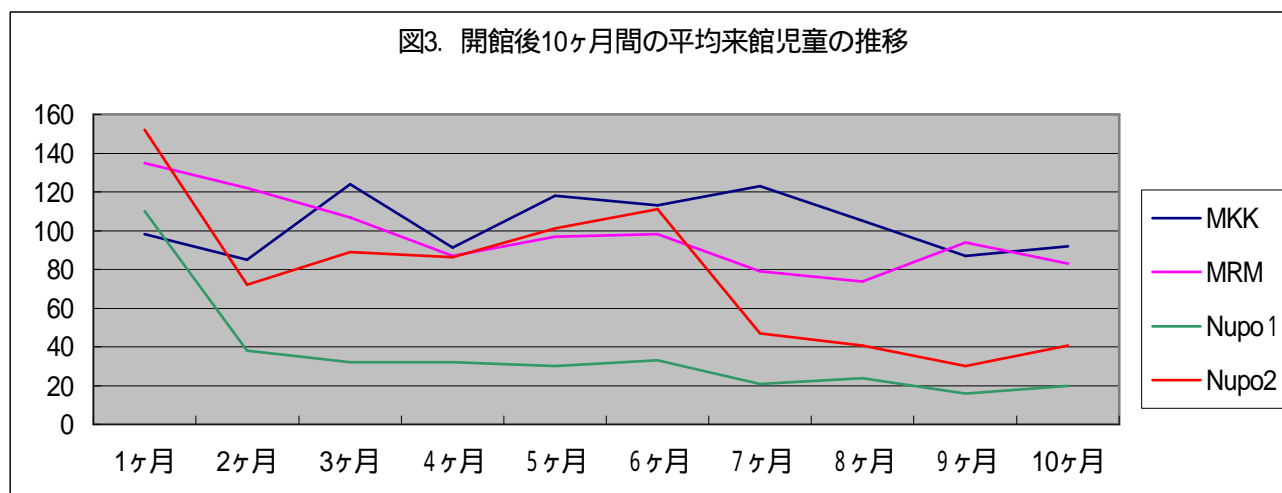


図3はメコンカ(MKK)、メラマルアン(MRM)、ヌポ(NUPO)の各図書館の開館から10ヶ月間にわたる、一日平均あたりの児童来館数の推移をあらわしている。8館の図書館のなかでも、10ヶ月後にはメコンカ、メラマルアンが一日平均90名前後に落ち着いたのにたいし、ヌポの図書館は第1が平均20名、第2図書館は平均40名程度と低く、やはり1-1で述べた利用時間帯の問題が反映した結果となっている。また、モニタリング時での調査では、平日に児童がほとんど来館しないために、図書館員も読み聞かせやワークショップでSVAが指導をした児童むけの図書館活動をまったく実施していない日が多く、子どもがあまり来ないという状況は、図書館員の活動にたいする意欲にも影響を及ぼしていると思われる。

1 - 3 . 児童の読書傾向

開館後10ヶ月を経過するが、児童の読書傾向をはかるのは、非常に困難であるというのが現状である。その要因としては、1つに図書館を訪問する児童の来館頻度が非常に低く、定着した複数児童の利用がみられないこと。第2に日常的な図書館員の絵本の読み聞かせ冊数が月平均20冊程度(他の難民キャンプ図書館の月平均が150冊前後)にとどまり、60%の児童が図書館の絵本を自分で10冊程度しか読んでいないと答えていること。第3に、図書館員がこれまで4名がやめ、初期から継続して働いている図書館員2名(1名は2ヶ月間産休)も、新人が入るたびに状況によって第1図書館で働いたり、第2図書館で働いたりしなければならなかったために、1箇所の図書館で継続してこれまで働いた経験のある図書館員がまったくいない。このため、児童の読書傾向を図書館員自身に尋ねることが難しいこと。などが今回ヌポの児童の読書傾向をはかることを困難にしている。

メコンカ、メラマルアンともに、学年があがるにつれて、図書館で読んだ絵本の冊数も増えていたが、ヌポでは学年が低学年から中学年にあがっても、図書館に配布をしている57タイトルの絵本をすべて読んだことのある児童はまったくおらず、これは図書館員の読み聞かせの頻度の少なさも反映していると思われる。図書館員は、「子どもたちはすでに絵本を全部読んでしまったので、読み聞かせに興味を示さない。」という意見であるが、SVAのローカルスタッフが読み聞かせをおこなう際には、大勢の児童が参加をしており、『とんとんとめてくださいな』『ライオンとねずみ』『ぐりとぐら』など、動物が主人公で、お互いに助け合う話や、仲良く交流をするストーリー展開の作品が好まれている。児童への調査と図書館員の意見とでは大きな開きが見られる。

1 - 4 . 図書館でおこなわれる文化活動

表2 . 年齢別図書館の文化活動への関心順位

学年	ベスト3	活動名	学年	ベスト3	活動名
3-5 歳	第1位	布の絵本	2 nd -4 th	第1位	お絵かき
	第2位	磁石でのつり		第2位	工作
	第3位	紙芝居		第3位	絵本の読み聞かせ
KG-1 st	第1位	磁石でのつり	5 th -7 th	第1位	-
	第2位	布の絵本		第2位	-
	第3位	歌とゲーム		第3位	-

図書館では、絵本の読み聞かせのほかに、さまざまな文化活動(絵本の読み聞かせ すばなし ペープサート 紙芝居 布の絵本 磁石での魚釣り ゲーム 手遊びと歌 工作 おりがみ お絵かき 他の活動)を実施できるよう、図書館員にワークショップを実施している。児童の文化活動への嗜好は年齢と個々の興味によって異なっているが、各館に共通しているのは、幼児から低学年にかけては、集団での遊びや動きのある素材での活動(布の絵本、つりのゲーム、紙芝居など)を好む傾向がみられ、高学年になるにつれて、お絵かきや工作といった、集団的な遊びや共同作業から、個人的表現へと興味関心が移行しているのがわかる。こうした点は、メコンカ・メラマルアン両キャンプでも共通してみられた傾向であった。

しかしながら、こうした文化活動自体を定期的におこなっている他の難民キャンプ図書館に比べ、ヌポの図書館では紙芝居とお絵かきを除いては、ワークショップで指導をした活動が、指導直後の短期間しか実施されておらず、資材もほこりをかぶった状態で図書館員の部屋に放置されており、すべての文化活動(から 番まで)に参加をしたことのある児童は、調査対象児童のなかでは皆無であった。

1 - 5 . 図書館建築以前の児童の生活と現在

図書館ができる以前の生活を第2学年以上(9歳以上)の児童にアンケートを実施した。ヌポ難民キャンプでは、SVA が図書館活動の支援にはいる以前から公共図書館が存在したため、児童への本の貸出しもおこなわれていたが、実際には児童が読める本の数は他の NGO の出版物や英語の本などに限られており、また児童室はなかったため、児童を対象とした図書館という点では、今回建築された二館は、子どもたちにとっては新しい図書館の存在といえる。

開館以前は、64%の児童が放課後に自宅で家事手伝いをおこなっている。具体的には料理、洗濯、掃除、水運び、妹弟の世話などがあげられる。メコンカ、メラマルアンキャンプの児童では家事手伝いをおこなっていた児童は4割程度であったことと照らしあわせると、ヌポの児童が両親の手伝いに割く時間の割合は非常に高い。こうした生活スタイルは、開館後も特に変化はなく、図書館の開館時間帯の問題だけではなく、児童が図書館に来ることのできる自由な時間が少ない点も、図書館への来館頻度の低さにつながっているとみられる。

1 - 6 . 児童の図書館への感想 (図書館員から小学生へのインタビュー)

- * 図書館で本が読めるようになってとても嬉しい。また本からは良い手本を学べる (13 歳・女)
- * ぼくは医者になりたいので、将来は医学書や患者を看護する本を読みたい (12 歳・男)
- * 図書館ができて本を読む習慣がついた(11 歳・女)
- * あいている時間を本を読むことに費やすことができることを、とても幸せに感じる(10 歳・女)

この他には、知識を増やす本、ビルマ語の絵本、有名人の本、英語の本、漫画などの分野の要望があげられた。

2. 大人の利用者 (対象: 12 歳以上の図書館利用登録者)

アンケート記入者の人数と男女比

単位: 人

	男性	女性	計	総計
第1図書館	7	22	29	51
第2図書館	12	10	22	

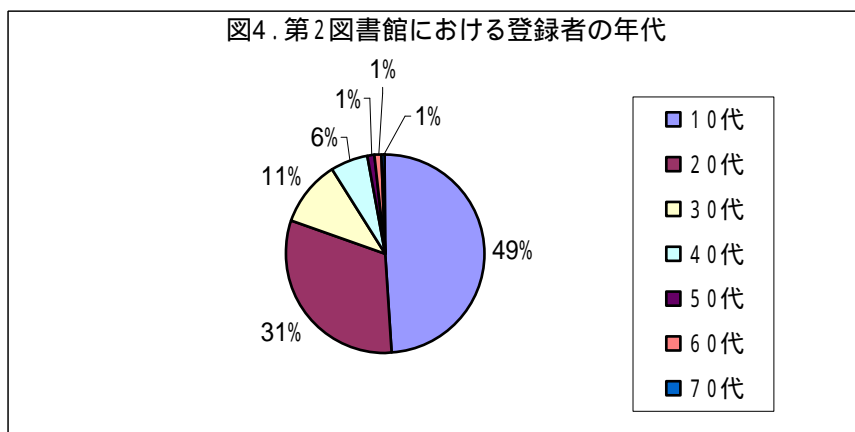
2-1. 貸出し登録者数と男女比および年代

表3. 各館における登録者の男女比

単位: 人

	男女登録者数	登録者計	計
第1図書館 (セクション8)	女性 334	483	1062
	男性 149		
第2図書館 (セクション6)	女性 386	579	
	男性 193		

2003年2月末現在



注) 第1図書館は、年代別の記録をしていなかったために調査不可。

ヌボ難民キャンプでは、第1図書館が従来あった図書館と同じ場所に再建築され、これまでの利用者にも継続して利用がしやすい環境にある。また今までは利用者が毎月5Bの会費を払うシステムであったが、SVAが支援にはいるにあたり貸出し制度を無料にしたため、キャンプ内で本を借りることのためにお金を出すことのできなかつた人々や、学生たちにも広く門戸が開かれることになった。2月末時点で、キャンプ内の人口のうち貸し出し登録が可能となる中学生以上の人口と照らし合わせると14%の人が図書館の利用者登録を済ませており、現在も毎月約20から50名の範囲で各館ともに増加傾向にある。このうち女性が20%、男性が9%の登録となっており、女性の登録者数が男性の倍にのぼる点は、ヌボ難民キャンプの図書館登録者の特徴といえよう。年代別には図4のように10代の登録者がほぼ50%を占め、20代までを含めると利用者の80%がこの年齢層にあたる。

2-2. 図書館の利用頻度

ヌボの図書館は、他の難民キャンプに比べて大人の利用頻度が高く、調査対象者の49%が一週間に数回は利用していると回答している。一日の来館者数も児童の利用より大人の利用者数のほうが高く、こうした点は、他の難民キャンプ図書館とは大きく異なる。これは従来から図書館があったために、図書館の利用に慣れている人が多いこと、また児童に比べて大人の利用者のほうが時間帯に制限なく来館できること、10代から20代の利用が大半を占めるために家事や子育ての負担が軽く、読書をする時間が比較的確保しやすいことなどが要

因としてあげられる。

2 - 3 . 大人の読書傾向

表4 . ヌポ難民キャンプにおける貸出し頻度の高い本ベスト5

	書 名	言語	内 容
1	Love Story	B	小説
2	Annual Magazine 2002	K	カレン語の雑誌
3	Dogs-Crooked Tail Turns- Straight	K	実在したカレン人2名の人生
4	Life and Lady	B	教育と生活
5	Home Magazine	K	カレン語雑誌

注)K カレン語 B ビルマ語

ヌポではビルマ難民キャンプのなかでも、ウンピャン難民キャンプに次いでムスリムの人口の割合が高く、ビルマ語の本の利用が高いキャンプである。このため、図書館で読まれている言語別の利用度も、ビルマ語 48%、カレン語 38%、英語 14%となっている。図書館に配布している大人の本の8割はビルマ語の本であるため、カレン語の利用比率の高い他の難民キャンプ図書館よりも、配布している図書全体が活用されているといえる。表の4は過去10ヶ月間の貸し出し頻度をあらわしている。ここではカレン語の本が上位5位以内に3冊入っているが、これはカレン語の冊数が非常にすくなために、貸し出しの頻度が高くなっていると思われる。

利用者には言語にかかわらず雑誌への要望が高く、今後もビルマ語の雑誌タイトルを増やして欲しいという声が高い。現在、すでに10タイトルのビルマ語の雑誌を配布しているが、これはすでに他の難民キャンプ図書館よりも5タイトル数を増やしている状態ではある。この他には、恋愛小説、探偵小説など小説や世界情勢などのニュースの要望があがっている。

2 - 4 . 図書館への要望

児童の親からは、もっと子どもたちのために本を増やしてあげて欲しいという要望がもっとも多く、さまざまな本と子どもたちとをひきあわせる機会の増加が望まれている。また、図書館活動にたいしては、低年齢の児童と高学年の児童とをわけて活動をおこなってはどうか、月に1度は定期的に特別活動をおこなってはどうかといった提案がなされている。また、大人の本に関しては、もっと図書館員に整理整頓をのぞむ声と、利用しやすい本の分類配置を希望する声があがっている。

3 . 保育園・小学校の教員

アンケート記入教員の人数 保育園:7名 ・ 小学校教員:14名

3 - 1 . 教員の図書館利用と来館頻度

今回の調査対象である21名の教員のうち、すでに図書館の利用者登録をしている人は16名。5名はまだを一度も訪問したことがないと回答している。登録者は平均して2週間に1度または1週間に1度の頻度で来館しているが、「職業をもっているために多忙で、あまり図書館に行くことができない」という点を、頻繁には図書館を利用することができない理由としてあげている。また登録をしていない教員は、「学校図書館があるからわざわざ図書館には行かない」「行く時間がとれない」「モバイル(移動図書館活動)によって図書館にある絵本が来るのを待っている」という理由をあげている。

3 - 2. モバイル(移動図書館活動)の反響と園児、児童の変化

すでにヌポではモバイルのワークショップを保育園、小学校教員(各校2名)にむけて実施したが、その後図書館にリクエストがあったのは保育園1校にとどまり、学校が長期の休暇に入ったこともあり、まったく実施されていないに等しい。このため現時点ではモバイル貸し出し後の児童の変化を教員から調査することはできなかった。

しかしながら、モバイルのワークショップに関しては「実施されれば子どもたちには非常によい影響を与えるであろう。」「カラーの絵本は子どもたちの興味をかきたて、読書力がつくのではないか」「読み聞かせは子どもたちはもちろん、自分にとっても有意義な活動である」との高い関心の声はよせられており、学校の休暇明けにモバイルを各校で実施することが望まれる。

3 - 3. 図書館への要望

全般として、図書館を利用している教員からは、「絵本をとおして子どもたちがカレン語、ビルマ語の言語能力が高まる」「本を読む機会が増えるということは、同時にたくさんの知識を得られることになる」など、絵本が児童に与える効用をある程度理解してくれている。こうしたうえで、さらにカレン語、ビルマ語での絵本の配布と出版の要望、図書館活動でおこなっている読み聞かせ以外の活動を学校で実施してほしいなどの声があがっている。また、図書館委員会への要望として「子どもたちがもっと図書館を利用しやすいように開館時間の変更」を望む声があるのである。

4. 図書館員

現在勤務している4名の図書館員にアンケートに回答してもらった。3月末現在での勤務期間については下の表のとおり。

図書館名	名前	勤務期間	備考
第1	Naw Ler Wah	開館時から。10ヶ月目。	
第1	?	3ヶ月目	
第2	Mya Naw Aye	開館時から。10ヶ月目。	期間中産休で2ヶ月は休職。
第2	Paw Kee La	6ヶ月目	

4 - 1. 図書館の仕事について

第1 図書館員

・ 図書館員になれたことは、非常に嬉しく、多くのことを知ることができるようになった。これまで外で遊ぶことばかりしていた子どもたちも日中は本を読んで過ごすことができるようになり、私自身も読み聞かせをしたり、おりがみを一緒に織ってあげたりすることができるようになりました。活動で難しいと思っていることは、本の在庫をチェックする作業です。個人的にはコンピューターについて、工作の勉強をしたいと思っています。

・ 子どもたちがゲームなどをすると大喜びしてくれるので、そんなときは私自身もとても幸せな気分になります。子どもたちと一緒にいるときは、できるかぎり子どもたちを幸せな笑顔で満たしてあげたいと思うのです。図書館員として働き始めてから私もお話をすることや歌をうたうことがうまくなりました。モバイルの活動がはじまったら、学校にいる子どもたちもお話がじょうずにできるようになるでしょう。図書館活動で大変だと思っていることは、在庫の確認と手遊びです。

第2 図書館員

- ・ 私たちカレン人が、より多くの教育が得られる機会をえてほしいと思っています。図書館はその役割を大いにはたしてくれる場といえるのではないのでしょうか。子どもたちのなかにはとてもいたずら好きの子どももいますが、彼らは図書館で“話す、聞く”という能力がついてきていると思います。私も子どもたちを幸せな気分にしてあげるために、お話をもっとしてあげたいです。キャンプのなかにはいろんな人がいますが、図書館を利用していている大半の人からは、図書館が子どもにも大人にもすばらしく価値ある場だと言われています。私はこれからも図書館員としての技能をみにつけられるのであれば、どんなことでも学びたいと思っています。今現在唯一難しいと感じていることは、本の紛失時の対応です。
- ・ 図書館員になることができ、とても幸せです。とくに子どもたちとゲームなどをして楽しく過ごすことは何よりおもしろく、彼らと一緒にいるときは、注意をはらい、可愛がるようにしています。図書館での活動は、子どもたちに読書力だけでなく、生活態度や性格形成にも大きな影響をあたえてくれていると思います。私はもっと子どもたちへのお話のしかた、接する際の話し掛け方などについて勉強をしたいと思っています。

4 - 2 . 図書館活動における要望

第1 図書館員

- ・ 図書館が再建されたので、キャンプの人たちは新しい本ばかりだと思って来館してきますが、実際には古い本ばかりだといわれてしまいます。もっと新しい本を配布してくれることを望みます。

第2 図書館員

- ・ 図書館活動のなかで歌の活動を子どもたちとおこなうことが私にはとても難しいです。こうした技能をもっと学びたいと思っています。また、図書館の開館と閉館時にカギを図書館委員会の事務所に毎回取りに行ったり返却をしにいかなければならないことをやや負担に感じています。

考察

ヌポ・キャンプにおける図書館活動で、現時点の課題は「開館時間」の問題であろう。すでに教員からも声があがっているが、土曜日に図書館を開館しているとはいえ、平日は学校の休み時間と図書館の休み時間が重なるために、お昼休みなどに図書館を利用することができていない。このため、学校に通っている児童にとっては平日に図書館へ行くことは非常に難しい状態となっている。児童が訪問しにくい状態は、図書館員自身へも影響を与え、平日には図書館活動はほとんど停滞し、土曜日には大勢やってくる児童をコントロールしきれないという状態をうんでいる。このことから児童の扱い、図書館活動の技能、ともに向上をはかることを困難としている。また、4名の図書館員が10ヶ月間に4回かわっており、高い技能をみにつける前に辞めてしまうため、児童が図書館員に親しむ関係づくりをきずくことをも困難としている。

図書館員自身は、4名それぞれが図書館活動のもたらす子どもたちへの良い影響を感じつつ仕事をしており、図書館活動の技能向上を希望している。現在は子ども以上に大人の来館者のほうが多く、そちらへの対応が主となっている。こうした状況を改善し、図書館員が有益に感じている子どもへのサービスを平日に実践できるようにするためにも、開館時間の一部変更がのぞまれる。

また、ヌポではキャンプ内の行事にあわせて「絵画コンテスト」をひらくなど、絵画にたいしての活動は積極的にとりいれておこなっている。こうした活動を今後も継続して開催することは、子どもたちに絵画への関心と技能の向上に役立つであろう。

大人の貸出しに関しては、若い年代を中心に活用されており、日常的に大人の部屋で読書をしている人の姿が見受けられ、大人の部屋が読書室としての役割をはたしている。また、大人の本の紛失冊数もさほど多くはなく、安定した貸出しがおこなわれているといえよう。今後は、すでに利用が軌道にのっている大人のサービスに加えて、児童へのサービスに力をいれ、図書館活動が軌道にのるよう SVA も継続した指導にあたりたい。

提言

今後、図書館活動の質の向上のために、以下の点の改善または工夫がなされることが望ましい。

開館時間の一部変更

図書館の昼休みをずらし、学校の昼休み時間に児童が図書館に来館できるようにする。

モバイル(移動図書館活動)の具体的な実施

すでに教員へのワークショップをおこなったが、教員は高価な絵本の紛失をおそれており、学校に借り出すことを躊躇しているため、初回は各学校へのフォローアップを図書館員におこなってもらおう。

図書館員へのおさらいワークショップの開催

新しい図書館員は、これまでおこなったワークショップにはほとんど参加しておらず、また初期から勤務している図書館員も技能を再度習得しなおす目的から数日間の再トレーニングを SVA からおこなう。

定期的に行事やイベント、コンテストなどをおこない、日常活動とのめりはりをつける。

すでに絵画のコンテストは何度か開かれているので、お話コンテストやス話のコンテストなど、図書館活動にちなんだ行事も開催してゆく。

地域の大人や青年層を活動に巻き込む。

たとえば、素話のできるお年よりを招く、民話収集への協力をあおぐ、民族楽器の演奏をしてもらうことが考えられる。

図書館員の労働体制の改善

第 2 図書館員からも要望があったように、鍵の管理は各館にまかせ、委員会は合鍵を保管するようにはどうか。

各図書館の活動やデコレーション状況の情報提供

他の難民キャンプの図書館がそれぞれどのような活動をし、どのようなデコレーションをしているのかが具体的にわかるように、SVA スタッフが各図書館の活動報告や、行事開催のようすをニュースレターにして知らせる。またデコレーションのようすも、アルバム化して閲覧できるようにする。これによって、他の図書館のアイデアを参考とし、より活発な図書館活動を実施できるようにする。

(3) メラ難民キャンプ図書館活動中間評価報告書

2003年8月

報告者:SVAメーソット事務所

図書館活動専門家 渡辺 有理子

概要と評価方法

- **背景** 2002年12月に開館したメラ難民キャンプ図書館(5館)は、活動を開始して7ヶ月が過ぎ、図書館員にたいする基本的な図書館活動に必要とされる技能指導もほぼ完了したため、現時点で図書館員および来館者を含めた活動状況を把握することとした。
- **評価目的** * キャンプにおける図書館活動の影響を明確にする。
* 図書館活動の利用状況を把握し、改善点を確認する。
- **事業目標** 上位目標:子どもと成人の知識、技能、価値が発達、改善される。
目 標:図書館活動が改善される。
- **調査対象** メラ難民キャンプ図書館(第一、第二、第三、第四、第五図書館)
* 児 童:図書館を利用している3歳~18歳。30名から50名。
* 大人の利用者:各館から25名~30名。
* 教 員:キャンプ内のすべての保育園、小学校から各校2名。
* 図書館員:各館2名。計10名。
- **調査方法** * 児 童:アンケート調査および各図書館に来館する児童30名以上を対象に、年齢ごとに色分けしたグループに分け、色紙の紙片を質問ごとに回答用紙の上に置く。
* 大人の利用者:アンケート調査
* 保育園・小学校教員:アンケート調査
* 図書館員:アンケート調査、関係資料の収集
- **調査メンバー** * SVAメーソット事務所長:中原 亜紀
* SVA図書館活動専門家:渡辺 有理子
* コーディネーター:Didi Wanakornkonglap
* アシスタントコーディネーター:Worachart Klanarongchao
* アシスタントコーディネーター:Phanada Kholoyuthpanaporn
* アシスタントコーディネーター:Madeline Sitkongtang
- **実施日時** 2003年6月30日、7月1日、2日、3日、4日
(メラでは土日が閉館であるため、すべての調査は放課後の3時過ぎにおこなわれた)

● 対象地域人口

メラ難民キャンプ人口

世帯数	13歳以上		6 - 12歳		5歳以下		計
	男	女	男	女	男	女	
5,416	10,873	10,579	3,549	3,329	2,102	1,990	32,422

2003年5月現在

調査結果

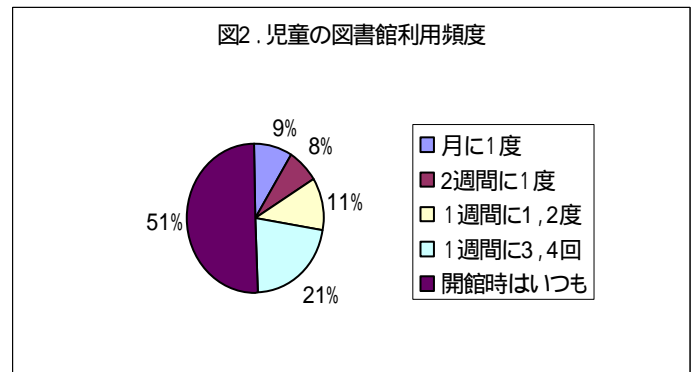
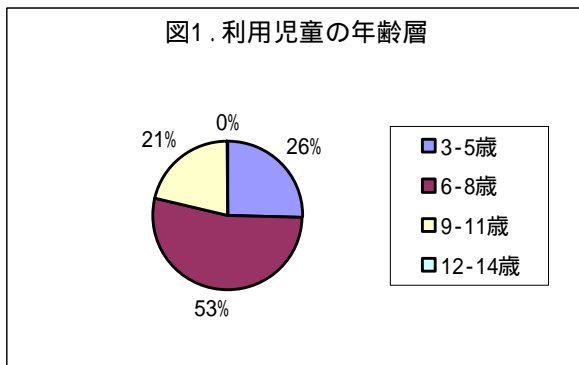
1. 児童の利用者

1-1. 利用者の年齢層と来館頻度

表1. 中間評価調査時の対象児童年齢と人数

単位:人

館名	3-5歳	KG-1 st (6-8歳)	2 nd -4 th (9-11歳)	5 th -7 th (12-14歳)	8 th -10 th (15-17歳)	女子	男子	計	総計
第1図書館	14	28	6	0	0	23	25	48	430
第2図書館	31	57	25	0	0	46	67	113	
第3図書館	27	52	11	0	0	49	41	90	
第4図書館	25	57	19	0	0	52	49	101	
第5図書館	13	34	31	0	0	3	75	78	

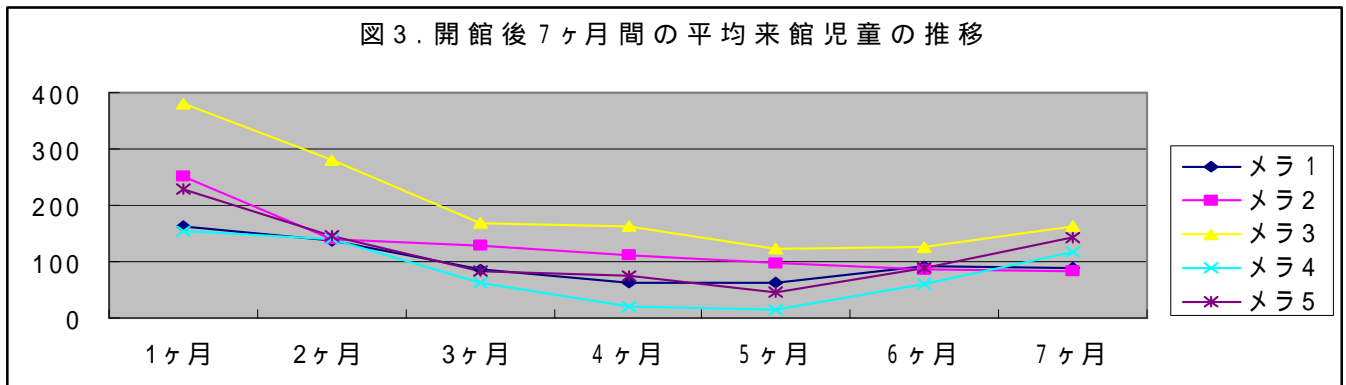


比較的学校のそばや通学路に建築されたメラ難民キャンプの各図書館(5館)は、好立地が影響して連日図書館のそばに住む児童が大勢来館している。図1のように利用児童は3歳から8歳までの幼児と小学校低学年が全体の8割を占め、自分で読むことの難しい低学年の児童を対象に、各館が児童からの読み聞かせのリクエストが絶えない状況となっている。このため開館したのが5つの難民キャンプのうち最後であり、活動の期間は7ヶ月間ととっても短い(メコンカはすでに2年7ヶ月経過)にもかかわらず、児童の扱い方に関する技能は、週末に児童の来館が集中する他のキャンプに比べて、個人差はあるにしても、比較的短期間で身についたといえる。

また、図2のなかで「開館時はいつも来ている」児童は、51%と5つの難民キャンプでもっとも高く、一度図書館を利用したことのある児童は、常連となって毎日図書館を利用しているとみられる。しかし、小学校と同じ敷地内にある第4図書館に関しては、学校が長期の休みとなった4月に、正面ゲートが閉鎖され、裏口からの利用となったために児童がほ

とんど来館せず、一日平均の利用が 20 名程度 (学校が開放時は一日約 120 名程度) と激減した。

1 - 2 . 一日平均あたりの来館児童の推移



他の難民キャンプの図書館は、学校が休みである土曜日は開館しているが、メラでは土曜日にも教会に行く人々や図書館員が多いことから土日を閉館している唯一の図書館である。しかし、学校のある平日しか開館していないにもかかわらず、連日

大勢の児童が各図書館を利用し、現在月平均の利用者数は、図 3 のように 5 館共に 130 名前後という他の難民キャンプ図書館とほぼ変わらない児童の利用者数を保っている。このため、他の図書館が土曜日に大勢の子どもの利用があるのにたいし、メラでは平日の昼休み時間と放課後の短時間に利用が集中していることになる。

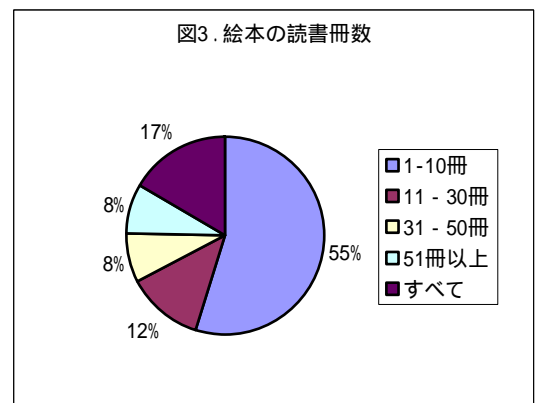
1 - 3 . 児童の読書傾向と使用言語

開館時に SVA から 68 タイトルの絵本が配布されたが、この 7 ヶ月間ですべての絵本を自分で読んだ児童は図 3 のように 17% にとどまり、10 冊以内という児童は 55% にもなる。

しかし、児童は「ほとんどの本はすでに内容を知っている」と答えていることから、自分で読むよりも図書館員に読んでもらうことで内容を覚えているとみられる。これは、メラの図書館を利用している児童の 8 割が 8 歳以下という低年齢児の利用が多いことに起因する。

また、利用している児童の 9 割はカレン語の絵本を読んでおり、ビルマ語の絵本を読んでいる児童は 1 割程度となつて

いる。このため、1 タイトルにつき 3 冊がカレン語、1 冊がビルマ語という配布の割合は、適当といえる。



メラの児童に人気の絵本は、他の難民キャンプと共通して『ひとまねこざる』の人气が高く、好奇心のおもむくままに行動をし、失敗をするなかから学んでゆくキャラクターが支持されている。また『ぞうのババール』のように、人間と動物とが心をかよわせる話や、『ながひげじいさん』のように長いひげで絵を書いたり、床を掃除するなど、奇想天外な発想の本に人气が高い。また、『さんびきのくま』にたいしては、「誰もいない留守に許可もなく人の家に入るのはよくないことだ」という意見が多数あがった。

1 - 4 . 図書館でおこなわれる文化活動

表2 . 年齢別図書館の文化活動への関心順位

学年	ベスト3	活動名	学年	ベスト3	活動名
3-5 歳	第1位	布の絵本	2 nd -4 th	第1位	カードゲーム
	第2位	紙芝居		第2位	磁石での魚釣り
	第3位	磁石の魚釣り		第3位	布の絵本
KG-1 st	第1位	布の絵本	5 th -7 th	第1位	
	第2位	磁石での魚釣り		第2位	
	第3位	紙芝居		第3位	

図書館では、絵本の読み聞かせのほかに、さまざまな文化活動(絵本の読み聞かせ すばなし ペーパーサート 紙芝居 布の絵本 磁石での魚釣り ゲーム 手遊びと歌 工作 おりがみ お絵かき 他の活動)を実施できるよう、図書館員にワークショップを実施している。他の難民キャンプでは、児童の文化活動への嗜好は年齢と個々の興味によって異なっていたが、メラでは3歳から11歳にいたるまで、共通して「磁石での魚釣り」の人气が高く、魚を釣ることの楽しさと、磁石という素材そのものへの関心が高いと思われる。また、「布の絵本」も紙の紙でできた絵本と違って素材がページからページへ移動ができることから、幼児にも容易に受け入れ、人気の高い活動のひとつとなっている。しかし、「布の絵本」は障害をもつ子どもたちへの使用目的のために各図書館に配布をおこなったが、実際には障害をもつ子どもたちはなかなか図書館に来ることができず、利用の中心は健常児ばかりというのが現状である。

1 - 5 . 図書館建築以前の児童の生活と開館後の感想 (9歳以上の児童97名へのアンケート調査)

SVAの支援がはじまる以前、キャンプ内にはKWO(カレン女性グループ)が運営する図書館が2館存在したものの、継続した支援がないことでの蔵書数の少なさや建物の老朽化などのために、SVAの支援で図書館ができることが決まった段階で古い蔵書はすべて最寄の学校などに分配された。このため児童にとっては図書館というものを実際に活用できるようになったのは、SVAが支援にはいってからであるといえる。図書館が開館される以前は、放課後には両親の手伝いに時間を割いており、男女共通しているのは「水汲み」、また女の子は料理や妹弟の世話、男の子はフットボールなど野外での遊びをしていた。開館後も、両親の手伝いは継続しておこなっているが、図書館での活動に参加するために、これまで外遊びをしていた時間が大幅に減っている。今後、児童はさらに多くのカレン語の絵本と、英語のやさしい本、紙芝居などの配布を希望している。

2 . 大人の利用者 (対象:12歳以上の図書館利用登録者)

アンケート記入者の人数と男女比

単位:人

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
12名	47名	18名	26名	11名	3名	1名	1名

男性:51名	女性:67名	無記入:3名	計 121名
--------	--------	--------	--------

2 - 1. 貸出し登録者数と男女比および年代

表3. 各館における登録者数

単位: 人

	男女登録者数	登録者計	計
第1図書館	女性: 194	311	1721
	男性: 117		
第2図書館	女性: 239	351	
	男性: 112		
第3図書館	女性: 320	515	
	男性: 195		
第4図書館	女性: 177	268	
	男性: 91		
第5図書館	女性: 165	276	
	男性: 111		

2003年6月末現在

10 箇所あるミャンマー難民キャンプのなかでも最大規模の人口をかかえるメラ難民キャンプ。約3万2千人にのぼる人口にたいして、図書館数5館というのは単純に計算をすれば、約6400人に対して1館建築されていることになる。これは現在5つの難民キャンプのなかでも、もっとも人口比に対して図書館の数が少なく、図書館の存在を知らない住民や、自宅から遠いために図書館を利用できていない住民が、まだまだいると思われる。このため、貸出し登録が可能となる12歳以上が利用者登録を済ませた割合は8%と、5つの難民キャンプのうちもっとも低いものになっている。しかしメラの図書館では、あえて利用者登録をせずに図書館で本を読んで帰るだけの人も多く、登録をしない理由として「自宅に借りて帰ると返却し忘れるため」や「図書館のそばに来たときだけ館内で読むので十分」ということをあげている。

登録者のうち男女別には、男性は6%、女性は10%を占め、各キャンプが活動半年後には12%前後にのぼっていたのに対し、メラでは男性の利用は非常に低い。これは他の難民キャンプに比べて NGO の支援も多く、仕事や委員会活動、キャンプ内での商売などに時間を費やされている人や、ビデオ上映店の存在など、「図書館から本を借りる」ということ以外にも余暇を過ごすための選択肢が比較的広いことが要因の1つと思われる。年代別利用者は、図4のように、10代と20代の利用が全体の8割にのぼり、青年層が利用者の中心であるという傾向は他の難民キャンプの図書館と共通している。得に高校のそばに建築された第4図書館では、実に94%が10代の利用者に占められる。

2 - 2. 図書館の利用頻度と利用状況

一度利用者登録を済ませた人は、週に1回から数回は図書館を定期的にご利用しており、本を返却した際に、大半の人がまた別の本を借りて帰るといったことが繰り返されている。また比較的学校のそばや通学路に図書館が建築されており、利用者の8割を占める学生にとっては非常に利用しやすい点が、来館頻度の高さにあらわれているとみられる。

逆に月に1度以下と答えている割合は利用者の17%にのぼり、延滞者の問題はメラ図書館の各館に共通している。また、学習書の紛失が非常に多く、「カレン語 英語辞書」に関しては、開館後3ヶ月以内に5つの図書館のうち4箇所が盗難にあった。このほかにも英語学習の本を中心に、夜間の盗難が相次ぎ、対策として貸出し用の辞書をつくった(借りられないために盗んでいかれることを避けるため)点と、夜間は貴重な辞書や参考書類を図書館員の部屋に別保存して管理することにした。

2 - 3 . 読書傾向

メラでは利用者のうち、44%がスコークレン語、9%がポーカレン語、35%がビルマ語、17%が英語の書籍を利用している。ターク県の3つの難民キャンプのうち、メラ難民キャンプはビルマ語を理解するムスリムの人口が全体の1割と最も少なく、このためビルマ語の本よりもカレン語の本の要望が高くなっている。表4のように上位5以内のうち3冊はカレン語が占め、日常的に図書館へのリクエストもカレン語の本への要望が非常に多い。

全体的には雑誌の利用がもっとも多く、さらに雑誌の種類を増やしてほしいという要望もあがっている。また、貸出しをしていないビルマ語の百科事典やカレン語の辞書などは、学習の補助として教員や学生に歓迎され、館内でメモをとっている姿もみうけられる。

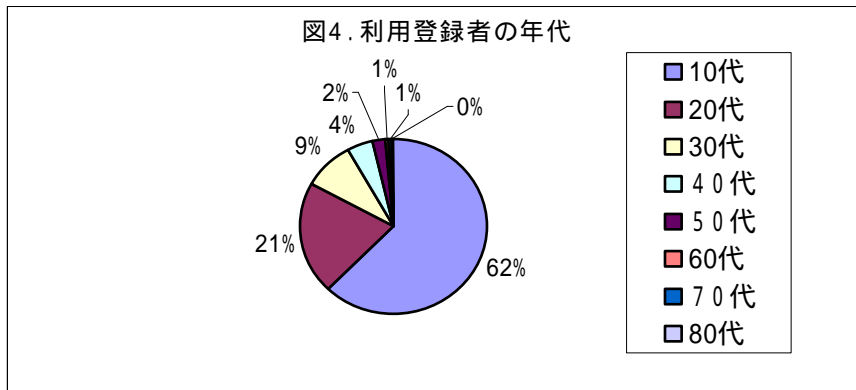


表4. メラ難民キャンプにおける人気の高い本ベスト5

	書籍	主な内容	言語
1	Karen Magazine “Home Magazine”	雑誌(カレンの文化、生活)	K
2	Burmese Magazine “Thootat”	雑誌(B
3	Karen Histry	カレンの歴史	K
4	Three Star and Elephant star	カレンの伝説的英雄物語	K
5	Burmese Novel		B

注) K カレン語 B ビルマ語

2 - 4 . 家庭における児童の変化

知識面、技能面、態度の面における開館後の児童の変化に対して、表5のような変化が児童をもつ家庭からあげられた。とくに図書館で読み聞かせをしてもらった話を家庭でする児童が多く、親も児童の話に耳を傾け、かつ寝る前にお話をしてあげるようになったために、児童の変化のみならず親子関係にもよい影響を与えているとみられる。親は、児童のカレン語の語彙が増えたことで、話を理解しやすくなったことも家庭で会話が増えた要因のひとつにあげている。

表5. 図書館開館後の児童の変化

知識	・カレン語の語学力の向上
技能	・読書力 ・話す能力 ・絵画の表現能力
態度	・両親や目上の人にたいする接し方が丁寧になり、手伝いをよくするようになった

- | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ・幼い妹や弟の世話をよくするようになった ・身の回りを清潔に保つようになった ・教会など大勢の前で話をするを恥ずかしくなくなった |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

2 - 5 . 図書館への要望

アンケートの大半は、要望よりも図書館が難民キャンプにできたことで、いかに人々の生活に変化ができ、子どもたちに多くの知識と経験をあたえてくれることになったかというお礼が8割を占め、それ以外に以下の要望が図書館委員会、図書館員、SVAへあがっており、今後の検討を要する。

< 図書館員または委員会にたいする要望 >

- * 子どもたちが本に関心を持ち続けるように、ぜひ絵本の読み聞かせは継続して毎日行ってほしい。
- * 館内のデコレーションが素晴らしいと、子どもたちたちも非常に嬉しそうだ。ときどき変化をつけてほしい。
- * 図書館の利用の仕方をもっときちんと利用者に説明してほしい
- * 図書館の開館、閉館の時間を守ってほしい。時間内に行ったのに閉まっていることがある(A1)
- * 生徒や教員が利用しやすい時間に、図書館をあけておいてほしい。
- * 子どもたちが継続して図書館を利用したくなるような企画をいろいろとやってください。
- * 厚めの本は読み終わらないので、貸し出し期間の延長をしてほしい
- * 図書館員はお互いに平和的に協力しあって働くべきだ
- * 書架の整頓をしっかりやってほしい
- * 一度に2冊かりられるようにしてほしい
- * 直接幼稚園に図書館員やSVAのスタッフがやってきて子どもたちに活動をやってほしい

< SVAにたいする要望 >

- * 多様な分野の本を配布してください。
- * 英語の語彙をふやすようなものを子どもたちに。
- * 子どもや青年にはもっと教育の本を、大人には政治の本をもっと配布してください。
- * 図書館には、子どもたちのための本 青年むけの本 大人の本の3種類が必要だ。
- * 子どもたちへの薬物の危険性についてのワークショップをSVAがしてくれたら、と思う。
- * もっと色々なゲームを図書館にいれてほしい。
- * 図書館が遠い子どもや大人たちが来られるように図書館をふやしてほしい。
- * 図書館のまわりにフェンスが必要だと思う。盗難などの問題を防げると思う。
- * カレンの歴史の本を子どもたちのために用意してほしい。
- * 絵本をもっとふやしてほしい。
- * タイ語の本もいれてほしい。
- * 老人むけの本の検討をしてほしい。
- * SVAのスタッフが、各セクションごとに出向いてもっと本の意義や価値、入手の困難さなどを話す機会をもうけてほしい。
- * SVAには今後も継続した支援を望む

3 . 保育園・小学校の教員

アンケート記入教員の人数

保育園:30名・ 小学校教員:12名

3 - 1 . 教員の図書館利用状況

今回の調査では、移動図書館活動のワークショップに参加した教員にアンケートの協力を仰いだり、回答者の42名中、半数を超える25名が、ワークショップに参加するまで一度も図書館を訪問したことがなかったと答えている。その理由として、「利用ルールがわからないので行かない」という理由がもっとも多く、ついで「教員の仕事が多忙で時間がない」「自宅から遠いため」という点があげられている。また、こうした状況は、保育園の教員以上に小学校の教員により多くみられる。しかし、図書館でおこなわれたワークショップに参加したことをきっかけに、今後図書館を利用したいという意見もあげられた。

3 - 2 . モバイル(移動図書館活動)の反響と園児、児童の変化

6月の中間評価の調査時点でモバイル活動が開始されていなかったために、学校における児童の変化や反響については調査不可。しかし、モバイルのワークショップをうけた教員からは、「これまで絵本の読み聞かせのしかたや話し方をならったことは一度もなく、実際子どもたちに実施したら非常に喜ばれるであろう。」「絵本は保育園児にとってもわかりやすい」との意見が多数あがり、園児や小学校の低学年が、絵本を読んでもらうことで言葉数を増やし、美しい絵を見ながら思考力と想像力を養うには非常に適した教材だと受け止められている。

3 - 3 . 児童の図書館来館状況

現在メラには保育園18校、小学校13校があり、教員が各クラスの児童来館状況を調査したところ、図書館に近い学校に通っている児童のうち、約半数弱は図書館を利用した経験があるが、図書館から遠い学校の児童は、まったく図書館を利用できていない。とくに保育園の教員からは、徒歩10分以上かかる距離は、保育園児が自分で通うことは非常に難しく、教員が引率をしていくことも困難であるとの点が共通した見解であった。また、保育園、小学校に共通して、図書館を利用している教員が少ないために、図書館のことを学校で児童に広報している教員はいない状態である。このため、メラ難民キャンプ内の保育園児、小学生には、まだまだ図書館の存在すら知らない児童が多数いると思われる。

3 - 4 . 図書館への要望

教員からの要望は、大きく三点に大別できる。一点目は絵本や図書館活動が児童に与える影響の大きさを予測し、広く利用をうながすためにも、一度図書館員が学校を訪問し、読み聞かせや図書館での活動を紹介してもらいたいという点。二点目は、図書館にあるような質の高い絵本を学校にも配布を希望。三点目は、図書館が遠い学校のそばに新しい図書館の増築。である。

4 . 図書館員

7月末現在、昨年12月の開館時から継続して働いている図書館員は10名中6名。この間4名(男性3名、女性1名)が交代した。現在は女性9名、男性1名の計10名が図書館員として働いている。メラ難民キャンプは図書館の数がもっとも多いために、図書館員の数も総勢10名になっているが、図書館委員会を中心に行事のうけあわせのために独自に会議をもったり、デコレーションの技術を交換しあうなど、非常に相互の連携協力ができている。

現在、各館に共通する問題は「本の紛失と延滞」の件であり、辞書の盗難、延滞時のキャンプの人たちへの対処のしかたなど、大人の利用に関する問題が大きい。さらにメラでは別の難民キャンプからの学生が勉強のために短期間滞在することが多く、こうした学生が本を借りてそのまま返却をせずにメラキャンプを去り、紛失が生じるなどの問題も報告されている。

図書館員へのアンケート調査結果

以下3名のアンケートを紹介する。

図書館員 Aさん

子どもたちは図書館に来るようになって、友達のことをもっとよく知ろうとしたり、友達との協調性がついたと思います。私も子どもたちと接することを心から楽しんでます。彼らは非常に礼儀正しくなり、キャンプ内のどこで会ってもあいさつをしてくれるようになりました。しかも丁寧な言葉です。子どもたちと一緒にいるときは、子どもたちの名前をたずねると同時に、私たちの名前も覚えてもらっています。図書館でのこうしたやりとりは、私をとっても幸せな気持ちにさせてくれます。

また、難民キャンプの人々は、長いこと図書館がほしいと願っていました。でもどうしたらいいのかわからなかったのです。今はSVAのスタッフの支援により、こうして図書館ができたことで、多くの人が本を借りにきています。これはまた、学校に行くことができていない子どもたちにとっても、非常にいい施設だと思います。学校教育を受けていない子どもたちは、文字を読めない子どもが多いので、絵本を読んであげることで、こうした子どもたちにも教育の機会を与えてあげられていると思うのです。

図書館 Bさん

図書館員になり、私自身が多くのことを学び、キャンプの人たちもたくさんの本からいろんなことを知ることができるようになったと思います。図書館員の仕事は、傍目で見ているよりも大変な仕事でしたが、読み聞かせや歌を子どもたちとするのはとてもおもしろく、何よりも子どもたちがとても幸せそうで、私自身もそうした子どもたちを見ることはとても嬉しいことです。将来的に、こうした子どもたちが、私たちの国を担っていく新しい人材と成長してくれることを望んでいます。これからは、図書館活動に関することであれば、どんなことでも学びたいと思っています。

図書館員 Cさん

図書館員になって以来、私は図書館とは、図書館員とは、ということ学びました。これからも子どもたちのために最善をつくして働きたいと思います。なぜなら、子どもたちは私たちの国を築く新しい世代であり、彼らの成長にかかわれることは非常に素晴らしいことだと思うからです。

個人的には、図書館は子どもたちの能力を高めることのできる施設だと思います。本は多くの知識を与え、彼らに新しい生活や生き方を提示することができます。また人格形成にも影響を与えるでしょう。私たち大人も、子どもたちに正しい道を指導することができます。子どもたちは、これまで知らなかったことを知り、いつも絵本のことを聞いてきます。わからないことがあると何なのかをたずねてくるし、知らなかった物の名前を知ることができるようになりました。子どもたちが成長するというのは、わからないことを尋ねてくることだと思います。

今では、図書館は本当にメラキャンプにとって重要な施設です。私は、世界中のすべての国、すべての学校に図書館は必要だと思います。人々はいつもいつも幸せだとは限りません。そんなときに若い人や大人たちが図書館に来ることができたら、と思います。図書館は、すべての老若男女にとって希望の一つです。

考察

メラ難民キャンプは、ビルマ難民キャンプのうち最大規模の人口を誇り、他の難民キャンプから勉強のために来る学生も多く、これまでの難民キャンプでは生じなかったような事態がおこることがある。その例として、大人の

貸出しでは、外部のキャンプから来た学生に本を貸し出して、返却されないままキャンプの外に持ち去られたり、子どもが図書館の絵本を持ち出し、キャンプ内で販売をして収入を得るなど、これまでにはなかったケースが生じた。それぞれの問題ともに人口の多さから追跡がしきれず、結果として本の紛失をまねくことになった。しかし、問題が生じるたびに図書館委員会が極力図書館員をバックアップするよう心がけてくれており、他の委員会や仕事を兼務している多忙な状況のなかで、非常に図書館活動に協力的な委員会であるといえる。

こうした図書館委員会のもと、10名の図書館員が短期間で基礎的技能を身につけ、相互に情報交換をしながら安定した図書館活動がおこなわれている。SVAも図書館員が交代したのちに、新人だけを集めてワークショップを再度おこなうなど、初期から働いている図書館員に負担がかからないように図っている。また、平日に多くの児童が来ることから、館内では図書館員は年齢に応じて同時進行でさまざまな活動をおこなっており、館内のデコレーションも図書館によってはトイレの壁まで児童の絵画や折り紙の作品であふれるなど、7ヶ月間という短期間のなかで、質の高い図書館活動をおこなうことができている。図書館員のアンケートからも、「読書」ということが子どもたちの将来に不可欠であるという、図書館活動の使命と目的を感じて働いている図書館員が多く、こうした自覚が活動を安定して支えている要素と思われる。一方で、図書館員は連日大勢の児童の対応に疲労も感じており、学校の教員のように年間のなかで長期の休暇の要望がだされている。

一般的にはメラ難民キャンプの5館ともに、現時点では大きな問題はかかえておらず、各家庭からは児童の知識、技能ともに目覚ましい向上が報告され、またキャンプ内の人たちからも無料での貸出しルールには、高い評価をえるなど、図書館活動自体が好意的にキャンプで受け入れられているといえる。

提言

今後、図書館活動のさらなる質の向上のために、以下の点の改善または工夫がなされることが望ましい。

定期的に行事やイベント、コンテストなどをおこない、日常活動とのめりはりをつける。

お話コンテストや素話のコンテストなど、図書館活動にちなんだ行事を企画、開催することで、児童の文化活動への参加意欲をより高める。

謄写版による利用案内の作成

図書館の開館時間帯や、利用のルールなどを知らないために、図書館に行かないという人たちが多くことから、謄写版で図書館の利用案内を作成し、登録をしにきた人や学校、キャンプ内の施設などにおいてもらい、広く利用のしかたを知ってもらう。

地域の大人や老年層を活動に巻き込む。

若年層の利用が多いため、素話のできるお年よりを招く、民話収集への協力をあおぐ、民族楽器の演奏をしてもらう等、経験豊かな30代以上の人を図書館にむかえ、児童との交流をはかると同時に、伝統文化継承となる活動を取り入れてゆく。

モバイル(移動図書館活動)活動の専用ボックス化

メラでは学校の数が非常に多いために、図書館の絵本を貸し出しをするのではなく、モバイル活動専用の図書(ボックス)を用意し、各ゾーンごとに学校間を巡回させてはどうか。この実施に関しては教育委員会との協議を要する。

大人の延滞ルールの統一と徹底化

日常的に延滞者が多く、各館共通した問題となっている。図書館委員会との会議で決まった「延滞料金制度」を図書館員に解説をしておし、利用者にも理解ができるように館内に表示する。

利用者からの提言の検討

利用者からは、今回の調査で具体的な提案やアドバイスをあげてもらっており、こうした提案を委員会、図書館員とともに検討し、実施可能な点は図書館活動に取り入れる。

(5) ウンピラム難民キャンプ図書館活動中間評価報告書

2003年6月

報告者: SVA メーソット事務所

図書館活動専門家 渡辺 有理子

概要と評価方法

- **背景** 2002年8月末に開館したウンピラム難民キャンプ図書館(2館)は、活動を開始してすでに9ヶ月が過ぎ、図書館員にたいする基本的な図書館活動に必要な技能指導もほぼ完了したため、現時点で図書館員および来館者を含めた活動状況を把握することとした。
- **評価目的**
 - * キャンプにおける図書館活動の影響を明確にする。
 - * 図書館活動の利用状況を把握し、改善点を確認する。
- **事業目標**
 - 上位目標: 子どもと成人の知識、技能、価値が発達、改善される。
 - プロジェクト目標: 図書館活動が改善される。
- **調査対象** ウンピラム難民キャンプ図書館(第一、第二、第三図書館)
 - * 児童: 図書館を利用している3歳~18歳。30名から50名。
 - * 大人の利用者: 各館から25名~30名。
 - * 教員: キャンプ内のすべての保育園、小学校から各校2名。
 - * 図書館員: 各館2名。計6名。
- **調査方法**
 - * 児童: アンケート調査および各図書館に来館する児童30名以上を対象に、年齢ごとに色分けしたグループに分け、色紙の紙片を質問ごとに回答用紙の上に置く。
 - * 大人の利用者: アンケート調査
 - * 保育園・小学校教員: アンケート調査
 - * 図書館員: アンケート調査、関係資料の収集
- **調査員**
 - * SVA メーソット事務所長: 中原 亜紀
 - * SVA 図書館活動専門家: 渡辺 有理子
 - * コーディネーター: Didi Wanakornkonglap
 - * アシスタントコーディネーター: Prinrapaporn Tongdee
 - * アシスタントコーディネーター: Phanada Kholoyuthpanaporn
- **実施日時** 2003年5月2日、3日

● 対象地域人口

ウンピラム難民キャンプ人口

世帯数	13歳以上		6 - 12歳		5歳以下		計
	男	女	男	女	男	女	
3,518	6,288	5,982	2,056	1,936	1,140	1,077	18,479

2003年3月現在

調査結果

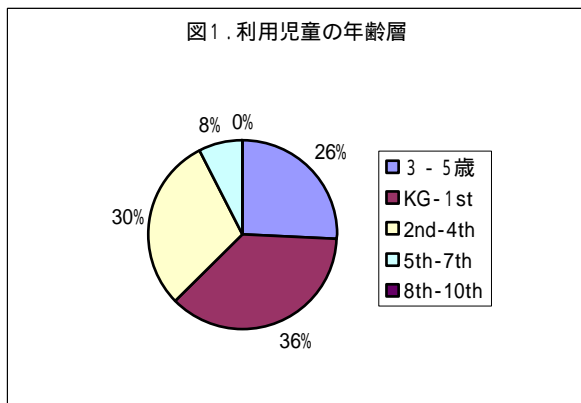
1. 児童の利用者

1-1. 利用者の年齢層と来館頻度

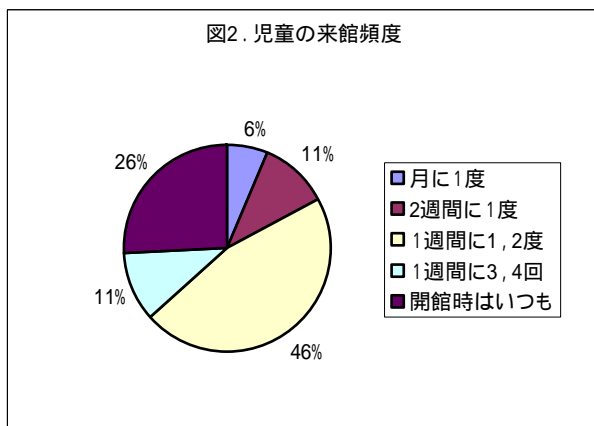
表1. 中間評価調査時の対象児童年齢と人数

単位:人

館名	3-5歳	KG-1st (6-8歳)	2nd-4th (9-11歳)	5th-7th (12-14歳)	8th-10th (15-17歳)	女子	男子	計	総計
第1図書館	14	16	12	4	0	27	19	46	144
第2図書館	11	29	20	1	0	21	40	61	
第3図書館	12	8	11	6	0	16	21	37	



ウンピラム難民キャンプは各図書館がそれぞれ徒歩で15分間隔の場所に建築され、小学校にも近いために昼休みにも児童が利用しやすい立地条件にある。利用年齢は、幼児から小学校高学年にかけて幅広い年齢の児童に利用され、図書館員によるバランスのよい活動プログラムと子どもの扱いが、こうした幅広い年齢の児童の利用を可能としているとみられる。また、中学生の利用もメコンカ、メラマルアン、ヌポのうちもっとも高い割合となっている。



来館頻度(図2)は、開館後9ヶ月を経た状況のなかで「週に1,2回」の46%、「毎日来館する」26%の大きく二つの利用層に落ち着き、低学年ほど頻繁に図書館を訪問しており、高学年になるにつれて来館頻度は減る傾向にある。利用時間帯は、47%が午前中に来館し、20%の児童は放課後にも再び来館している。ウンピラムでは各図書館が学校の昼休み時間と放課後にも開館しているため、児童にとっては図書館活動に参加しやすい環境が整えられており、学校の5分休みの間にも、児童が走って図書館に来る姿がみられる。

しかしながら他の難民キャンプに比べて標高が高く、強風に見舞われやすい自然環境は、時期によって図書

館に来る児童の足を妨げる要因ともなっている。

1 - 2 . 一日平均あたりの来館児童の推移

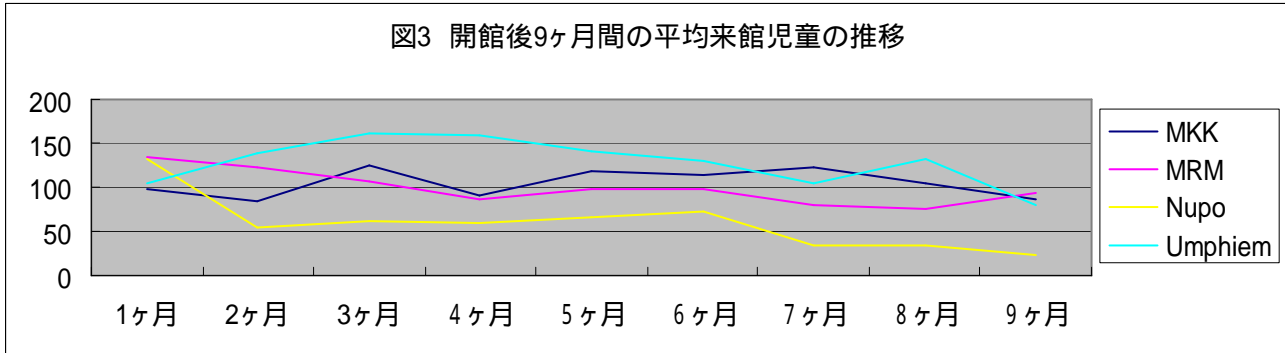


図3は、メコンカ(MKK)、メラマルアン(MRM)、ヌポ(NUPO)、ウンピアムの各図書館の開館から9ヶ月間にわたる、一日平均あたりの児童来館者数の推移をあらわしている。これまで各図書館では、開館後から来館者数が減少する傾向にあったが、ウンピアムの場合は開館後から3ヶ月間は児童の来館者が増加しており、図書館員による開館後の児童対応の的確さが反映した結果とみられる。活動開始9ヶ月目には、80名前後に落ち着き、MKKやMRMと同様な平均来館児童数となっている。

1 - 3 . 児童の読書傾向と使用言語

ウンピアムではムスリムの人口が24%を占め、SVAが支援している5つのビルマ難民キャンプのうち、もっともビルマ語とカレン語の両言語の図書館活動が必要とされる難民キャンプである。特にムスリム居住区に近い第3図書館では、来館する児童のうち60%をムスリムの児童が占め、ビルマ語での活動が特に必要とされる図書館となっている。こうした状況に伴って図書館員はビルマ語とカレン語の各言語を話す図書館員が勤務しており、2人の図書館員がそれぞれ手分けをして各言語での読み聞かせや活動説明をおこなっており、特に大きな問題は生じていない。

各図書館では共通して日常的に絵本の読み聞かせおよび素話を積極的におこなっており、一日平均15冊程度の読み聞かせが実施されている。図書館員によっては、児童が館内に1人しかいない場合にも読み聞かせをしており、こうした図書館員の働きかけが、常連の児童の好みの本を把握できるまでにいたっているとみられる。また、児童は各館共通してアクションつきの絵本(『おおきななぐ』『クラドクラディクラドクラデ』)を好んでおり、こうした点も図書館員がいかに児童を巻き込んで日常的に読み聞かせをおこなっているかがうかがえる。この他には、好奇心にあふれ、自分のやりたいことを次々と実現していゆく『おさるのジョージ』や、主人公が親の言いつけを堅実に守ろうと努力をする『はじめてのおつかい』は、ウンピアムだけではなく、各難民キャンプ図書館に共通して人気が高い。また、絵本のほかに、紙芝居が好評を得ており、リクエストが日常的に絶えず、図書館員からもより多くの紙芝居の配布が希望されている。

1 - 4 . 図書館でおこなわれる文化活動

表2 . 年齢別図書館の文化活動への関心順位

学年	ベスト3	活動名	学年	ベスト3	活動名
3-5歳	第1位	ゲーム	2 nd -4 th	第1位	磁石のつり
	第2位	磁石のつり		第2位	歌と手遊び
	第3位	読み聞かせ		第3位	ゲーム
KG-1 st	第1位	磁石のつり	5 th -7 th	第1位	お絵かき
	第2位	紙芝居		第2位	素話
	第3位	ゲーム		第3位	磁石のつり

図書館では、絵本の読み聞かせのほかに、さまざまな文化活動(絵本の読み聞かせ すばなし ペープサート 紙芝居 布の絵本 磁石での魚釣り ゲーム 手遊びと歌 工作 おりがみ お絵かき 他の活動)を実施できるよう、図書館員にワークショップを実施している。児童の文化活動への嗜好は年齢と個々の興味によって異なっているが、幼児から高学年にいたるまで共通して「磁石での魚釣り」が非常に人気が高い。他の難民キャンプ図書館では、低学年にのみ人気の高い活動であったが、ウンピラムでは低学年から高学年までが一緒になってこの活動を共有して楽しんでいることがうかがえる。また、他のキャンプでは「あまり子どもたちは好まない。」とされていた「歌と手遊び」の活動が、第2学年から第4学年のところであがっており、図書館員が強要することなく、楽しませるかたちで児童と活動をおこなっていることがわかる。

全般的には、各図書館では異年齢の児童が同時に来館した場合に、年齢に見合った活動を同時進行でおこなっており、ワークショップで指導をした文化活動をすべて図書館活動で実践されている。

1 - 5 . 図書館建築以前の児童の生活と開館後の感想 (9歳以上の児童 45名へのアンケート調査)

図書館が開館される以前、児童の放課後の生活は、水汲み、妹弟の世話、料理、掃除といった両親の手伝いが主となっており、特に女兒にこの傾向が強い。男児はフットボールまたは外遊びをしてから、こうした両親の手伝いに参加している。現在は図書館の開館により、外遊びの時間が減り、図書館活動に参加することで屋内で過ごす時間が以前よりも増えた。何よりも開館前の生活では、放課後に宿題以外に本を読む機会は皆無に等しかったが、図書館に児童書が配架されたことで、カレン語またはビルマ語で本を読む時間ができたことは、生活に大きな変化がでたと45名中38名の児童が返答している。また、図書館でおこなわれる多様な文化活動への参加も、図画工作の時間が学校教育で取り入れられていないだけに、参加できることは大きな喜びとなっているとみられる。

また、児童はさまざまな本からさらなる知識の向上を望んでおり、将来は医者、教員を中心に、牧師、画家、図書館員、カレン州で活躍できる人物になることを望んでいる。

1 - 6 . 図書館への要望

児童からの要望は、ほとんどが本に関するリクエストであり、今後もカレン語の絵本をより多く配布することが望まれている。次いでやさしい英語の絵本、科学の本の希望が高く、高学年になるにつれて物語以外に、知識欲をみたとすような本への関心が高まり、こうした本の配布も今後の課題といえる。

2 . 大人の利用者 (対象:12歳以上の図書館利用登録者)

アンケート記入者の人数と男女比

単位:人

10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
16名	24名	22名	18名	8名	1名	89名

男性:37名	女性:52名	計 89名
--------	--------	-------

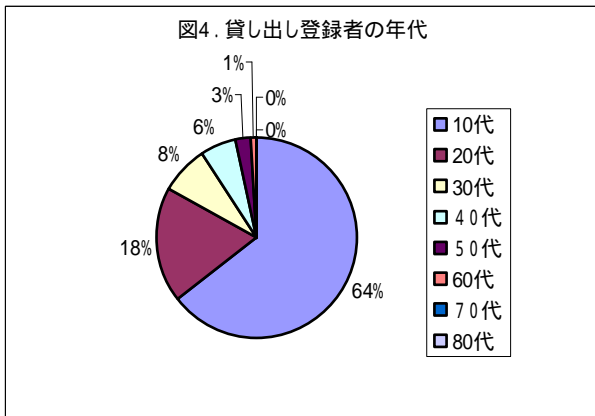
2 - 1 . 貸出し登録者数と男女比および年代

表3 . 各館における登録者の男女比

単位:人

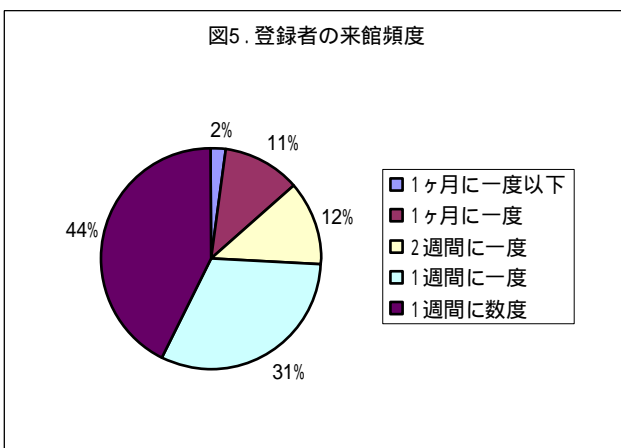
	男女登録者数	登録者計	計
第1図書館	女性: 335	612	1,643
	男性: 277		
第2図書館	女性: 285	527	
	男性: 242		
第3図書館	女性: 284	504	
	男性: 220		

2003年4月末現在



ウンピラム難民キャンプでは、これまでKWO(カレン女性グループ)の運営する図書館があったが、現在は閉館し、小説を中心とした300冊の蔵書は各館に100冊ずつ分配された。4月末時点で、キャンプ内の人口のうち、貸し出しが可能となる12歳以上の人口と照らし合わせると、13%の人が利用者登録を済ませている。男女別の登録比は女性が15%、男性が12%となっており、やや女性のほうが登録を済ませた比率が高くなっている。しかし、キャンプ全体の人口から見ると、まだまだ図書館を活用している人口はさほど多いとはいえない。年代別には、図4のように10代の利用者が全体の64%を占め、図書館別にみると第1図書館が66%、第2図書館が73%、第3図書館は54%が10代の利用者となっている。これに20代までの利用を含めると、実に図書館を利用している人の8割は10代と20代ということになる。逆に50代以降の利用はわずか4%にとどまっている。

2 - 2 . 図書館の利用頻度



ウンピラムでは、一度登録をした利用者は、頻繁に図書館を利用しており、44%が週に数回は利用をしている。これは児童だけではなく、大人にとっても非常に利用しやすい立地条件に図書館がある(メイン道路に面している)点と、利用者の8割が10代、20代であることから、学校の通学時に気軽に立ち寄ることができているとみられる。

しかし、半面で延滞者が多く図書館員を悩ませてもおり、延滞のルールを徹底化することが望まれる。

2 - 3 . 大人の読書傾向

表4 . ウンピラム難民キャンプにおける人気の高い本ベスト5

	書籍	言語
1	Burmese Magazine “Thootat”	B
2	Burmese Novel	B
3	Karen Magazine “Home Magazine”	K
4	Burmese Cartoon	B
5	Burmese love story	B

注)K カレン語 B ビルマ語

4月末現在、各図書館にはビルマ語の本196冊、カレン語の本130冊が配布され、一人一度に2冊まで借りられる。調査対象の150名のうち、32%がスコーカレン語、2%がポーカレン語、45%がビルマ語、21%が英語の本を読んでおり、ヌボ難民キャンプ同様に、ビルマ語を理解する人口が高いことから、図書館に配布の多いビルマ語の本が活用されているといえる。

大人向けの本は、ビルマ語に関しては小説、実用書、学習書、百科事典、雑誌、スポーツニュースなど多分野の本を配布しており、出版物が少なく、同じタイトルを複本でいれることで冊数を増やしているカレン語に比べると、充実した内容となっている。なかでも、ビルマ語の雑誌(5タイトル配布)は圧倒的に人気が高く、これに伴って破損や中の写真を切り抜かれるなどの問題も生じている。今後の要望としては、ビルマ語雑誌のタイトル数の増加、医学・健康の本、英語学習の本の充実が望まれ、また、利用者層が10代、20代中心であることから、恋愛小説、占いの本への要望も高い。

2 - 4 . 家庭における児童の変化

開館後の9ヶ月間で、特に大きな変化としては、1つに読書欲がついた点と、2つ目にカレン語、またはビルマ語の語彙の増加をあげる声が児童の家庭からはあげられている。「絵本を読んでわからない言葉や聞きなれない言葉があると、どういう意味なのかを頻りに尋ねてくるようになり、急激に語彙が増えた。」ということが語彙の増加の背景といえる。また同時に、児童が獲得してゆく言葉が、絵本のなかで使われている丁寧な言葉遣いであり、「図書館員の読み聞かせを聞くことで、難しい語彙の発音もできるようになってきている。」という“言葉”に関する変化をあげる家庭が複数みられた。

また読書欲がついたことで、学校での学習意欲にもよい影響がはじめ、本を読んでわからないことがあると、別の本でさらに調べようとする姿勢や、友達同士で話し合うなど、図書館開館前後で児童に変化がみられたことを調査対象の38家庭中、37家庭までが述べている。その他には、絵本から得た丁寧な振る舞いをまねるようになった、人の話を注意深く聞けるようになってきた、絵を描くことに強い関心をもつようになった、好奇心が増したなどの変化があげられている。

2 - 5 . 図書館への要望

ウンピラムはこれまで中間評価をおこなった他のキャンプに比べて、家庭の親からの意見や要望が積極的にあげられている点が大きく異なる。これは図書館活動にたいする各家庭の関心の高さを反映しており、今後の図書館活動にたいする期待のあらわれでもある。全般として、図書館活動が子どもたちに非常によい活動であることを前提に、具体的な提案がなされている。SVA、図書館委員会および図書館員による検討を要する。

< SVAにたいする要望 >

- * 子どもたちへの本を増やしてほしい。さらに知識が増えるだろう。
- * SVAは高校や中学へ教育書や学習書の支援もしてほしい
- * 館内で読書しながらコーヒーなどを飲めるようにしてほしい。子どもたちにもお菓子をあげるなどのサービスを。
- * 利用者のリクエストをきいてほしい。またリクエストした本を確実に入手してほしい。
- * バンコクポストやSTUDENTWEEKLYなどの英語の新聞を。
- * 図書館員への給料を上げてあげてください。
- * カレン人として、カレン人の抱えている境遇や問題について知ることのできる本をもっと。(NEW EYESのような)
- * 図書館のまわりにもっと植物や花を植えられるように支援してほしい。もっと図書館が美しくなると思う。
- * 今後も継続した支援を望む。

<図書館員または委員会にたいする要望>

- * 利用者は本を元の場所に戻すなど、ルールを守るべきだし、図書館員も利用者への指導を徹底するべきだ。
- * シリーズの本だと気づかずに借りることがある。そんなとき、図書館員がアドバイスをくれたらと思う。
- * 児童画のコンテストやお話作り、素話コンテストなどをおこなったらいいと思う。もっとイベントの企画をしてほしい。
- * 図書館がよりよくなる提案をどんどん図書館員はSVAにしてあげてほしい
- * 現在一度に3日間の貸し出しだが、読み終わらない。もっと貸し出し日数を増やしてほしい。

3. 保育園・小学校の教員 アンケート記入教員の人数 保育園：17名・小学校教員：14名

3-1. 教員の図書館利用と来館頻度

教員は、アンケート回答者21名中、半数近い10名は一度も図書館を来館したことがないと答えている。この理由としては、「移動図書館活動で絵本を見る機会があるからあえて行かない。」「教員の仕事が忙しく、図書館に行く時間が取れない。」「どのように利用していいのかルールがわからないので行ってない。」などの理由があげられている。すでに登録をして図書館を利用している教員は、週に数度は図書館を来館しており、利用している教員と、まったく利用しない教員と、大きく二層に分かれる結果となった。

3-2. モバイル(移動図書館活動)の反響と園児、児童の変化

ウンピラムでは、すでにモバイル活動のワークショップを保育園、小学校教員(各校2名参加)を対象に実施したが、この後学校が長期休暇に入ったため、実際には第3図書館に保育園1校からリクエストがあっただけである。このため、現時点では、モバイル活動による児童の変化は調査できていない。しかしながら、貸し出しをおこなった1校からは、「子どもたちはモバイルで絵本が届いたときはとても幸せそうで、お話を楽しんでいた。」「子どもたちは絵本を見ているときはとても穏やかな表情で、いろんなことを感じたようだ。また図書館から借りることができたら、さぞ喜ぶだろう。」との感想が教員からもたらされている。すでに学校の休み明けにはモバイルを希望する声はいくつか届いており、今後キャンプ内の各校で実施されることが望まれる。

3-3. 図書館への要望

児童むけに物語だけではなく、教育的効果の高い本を要望する声が高く、一般常識や礼儀正しい振る舞い

を身に付ける本、動物の本(名前を覚えられるように)、質疑応答の本、作者の意図が明瞭な本、などがあげられている。また一方で、「すでに図書館にある絵本はどれも素晴らしく、子どもたちはまず図書館にある絵本をすべて読むことが先決。」という意見もあがっている。保育園のうち特に図書館から遠いセクション5の教員からは、「図書館が近かったら、子どもたちがもっと気軽に行くことができると思う。文字を読めない保育園児も、絵を眺めて本を楽しんだり、図書館から戻ってくるとお話を聞かせてくれたりします。こうした活動はすばらしく、ぜひ保育園の近くにほしい。」と、図書館建設を望む声もあがっている。

4. 図書館員 (各館2名:計6名)

5月末現在、開館時の6名中3名が入れ替わり、9ヶ月間継続して働いている図書館員は3名である。今回アンケートをおこなった6名のうち、2名の感想を以下紹介する。

図書館員Aさん

私はこの仕事がとても好きです。ですからこの仕事につけたことをとても嬉しく思いますし、誇りに感じています。子どもたちと一緒に歌を歌ったり、お話を読んであげるときは、私自身とても幸せな気持ちになりますし、親たちもこうした図書館が子どもたちのためにできたことを非常に喜んでくれています。暑い日や雨の日には、子どもたちは外で遊ばなくなり、図書館にくるようになりました。非常に興味深く図書館活動に参加してくれていると思いますし、活動の一つ一つが彼らの興味関心を満たしてくれていると思います。できれば子どもたちの幸せそうなようすを写真でとってあげたいです。

仕事をしていて特に問題はありますが、私はカレン語を話したり、理解することができないので、ときに不便を感じることはあります。今後もっと学びたいことは、おもちゃの作り方や工作です。

図書館員Bさん

図書館員になってから、私自身も多くのことを知りました。SVAが指導してくれたおかげで、アクションつきで絵本を読むこともできるようになりました。子どもたちにお話を読んであげたり、ゲームやお絵かきなどを一緒にするときは無常の幸せを感じます。おそらく図書館で絵本を読んでもらったことは、彼らが大きくなって記憶として残ることでしょう。また大人にとっても、難民キャンプに図書館ができたことは非常に歓迎されています。なぜならビルマ側にいたときは、もし本を借りようとしてもお金を払わなければならなかったからです。子どもたちは「図書館はすばらしい！本が読めるようになったし、図書館員に本を読んでもらえる。とってもうれしい！」と言っています。これからも指導してくれることはすべて学びだと思っています。

考察

図書館員、図書館委員会、SVAの三者の連携が非常に良好に働いており、問題が生じた場合にも委員会を通じて適切な対処が迅速におこなわれることが多く、こうした点がウンピアムの図書館活動が円滑におこなわれている最大の点と思われる。図書館委員会は図書館員と定期的に会議をもうけるなど、図書館活動への理解と協力体制が確立されており、現時点では活動の障害となるような問題は特に生じていない。

図書館員も6人中3名がすでに入れ替わっているが、そのたびに活動に支障や質の低下が生じることもなく、前向きに活動に取り組む人材が選ばれている。図書館員は相互に刺激を与えあっており、館内のデコレーショ

ンや児童への活動など、子どもたちに良いと思われる活動はとりいれるようにしている。またワークショップで指導をしたことは確実に実践しており、文具、図書館活動の資材の保存状況なども非常に良好である。ウンピラム難民キャンプでは、カレン語とビルマ語の両言語の使用がもっとも必要とされる環境にもかかわらず、館内では同時進行でそれぞれの児童にみあった活動をおこなうことができている。児童は絵本を読めるだけでなく、図書館員に会えることを楽しみに来館してくる児童もいる。図書館員と児童との関係構築も非常に順調にしているといえよう。

図書館開館後には、家庭からも児童の言語獲得に関するめざましい変化に図書館活動の効果を評価する声が多数あがっており、コンテストの開催や図書館の環境美化への積極的な提言など、図書館活動への家庭の関心の高さは、他の難民キャンプに比べて格段である。こうした周囲の理解のもと、短期間で安定した図書館活動を実践することができているといえる。今後は若年層だけではなく、より広い年齢層への図書館活動の広がりを目指すことが、第二段階の課題と思われる。

提言

今後、図書館活動のさらなる質の向上のために、以下の点の改善または工夫がなされることが望ましい。

定期的に行事やイベント、コンテストなどをおこない、日常活動とのめりはりをつける。

児童をもつ家庭からもリクエストがあったように、お話コンテストや素話のコンテストなど、図書館活動にちなんだ行事を企画、開催することで、児童の文化活動への参加意欲をより高める。

地域の大人や老年層を活動に巻き込む。

若年層の利用が多いため、素話のできるお年よりを招く、民話収集への協力をあおぐ、民族楽器の演奏をしてみらう等、経験豊かな30代以上の人を図書館にむかえ、児童との交流をはかると同時に、伝統文化継承となる活動を取り入れてゆく。

図書館の活動や利用について広報する

今回の調査で、「図書館の開館日時や貸し出しルールがよくわからないために、図書館に行っていない」という教員からの意見を考慮し、図書館の利用ガイド(貸し出しルール、利用できる本の紹介など)を謄写版のWS後に製作をし、地域に配布する。

モバイル(移動図書館活動)を軌道にのせる

現時点でまだはじまっていないモバイルの活動を、教員との協力のもとで利用を軌道にのせる。

貸し出し利用ルールの徹底化

ウンピラムでは大人の延滞者が多く、図書館員を悩ませている。また利用者が10代、20代であるために、ときに紛失、破損時に支払いができないケースもでてくる。極力こうした事態を避けるため、登録カードの裏面だけではなく、大人の部屋に貸し出しルールを張り出すなど、利用者に基礎ルールをもっと理解してもらうようにする。

利用者からの提言の検討

利用者からは、今回の調査で具体的な提案やアドバイスをあげてもらっており、こうした提案を委員会、図書館員とともに検討し、実施可能な点は図書館活動に取り入れる。

各図書館の活動やデコレーション状況の情報提供

他の難民キャンプの図書館がそれぞれどのような活動をし、どのようなデコレーションをしているのかが具体的にわかるように、SVAスタッフが各図書館の活動報告や、行事開催のようすをニュースレターにして知らせる。またデコレーションのようすも、アルバム化して閲覧できるようにする。これによって、他の図書館のアイデ

アを参考とし、より活発な図書館活動を実施できるようにする。